

松前の桜と北海道の旅記念文集

2004年5月7日～10日



米欧亜回覧の会

目 次

天佑	松前孝廣	3
春の道南4日間の旅・日録	西井易穂	4
田中彰氏の講演「岩倉使節団の今日的意義・要約」		16
道南の旅スナップ集	浅生庸子	18
北海道への愛着	阿部修二郎	19
道南を旅して—松前の桜と函館の夜景と札幌の講演会	石川直義	20
松前、函館、札幌、三つの発見	泉 三郎	24
松前の旅を終えて	岩田美智子	28
北海道 松前 函館旅行	大久保利宏	28
北海道の旅「平成16年5月7日—10日」	小野博正	30
松前の桜	梶 春治	33
望蜀	佐藤ギン子	34
松前の桜	澤本佳子	36
北海道にて	永島千代子	37
始めて行った北海道	納家弘美	38
デンマーク国の話	西井正臣	38
道南にて詠める	西脇美都絵	40
歴史と文化を象徴する松前の桜	橋本吉信	41
松前の桜に感謝して	藤原宣夫	43
松前の桜と歴史事始	松本伸子	44
道南旅行の副産物	三原 浩	46
血脈	若盛宗雄	47
歴史を拾う旅として	水沢 周	49

表紙（トラピスト修道院）・西井易穂作



提供 松前孝廣

松前城の天守前で

後列左から 大久保 橋本夫妻 佐藤(満) 古後 石川 西井(正) 浅生 小野 阿部 澤本
中列左から 三原(恒) 永島 西脇 佐藤(ギ) 岩田 松本 納家
前列左から 水沢 若盛 梶 松前 泉 藤原 西井(易)の各氏

天 佑

5月6日(金)午後3時函館市庁へ表敬訪問。井上市長、西尾助役快くお出迎え下さり、市長室にて約40分程歓談後、会宛の「市長メッセージ」拝受。

午後4時、当会会員の倉藤金助様(名古屋在住)ご紹介にてゲスト参加の松本、澤本、岩田3名の方々と合流、直ちに松前に向かう。車中にてそれぞれ自己紹介、6時20分矢野旅館着。

小生、知人宅にて泊まる。夜中ふと目を覚ますと、何と、あろうことか戸外の雨降に気づき仰天。その後、寝付かれないまま早朝を迎える。嬉しいことに既に夜来の雨は止み、速い雲間に晴天を見て感激。

7時下見のため、光善寺の「血脈桜」を見て驚いた。この時期「南殿」は早咲きで、すでに散っているのが通常で、今年は開花が一週間遅かった事が幸い、小生、昭和36年5月16日「松前城落成記念式典」に初めて母と訪問して以来、幾たびか観桜のため訪れて

松前 孝廣

いますが、今回満開の「血脈桜」を見たのは初めてで、会員の方々と一緒に観桜でき嬉しく思います。

12時40分、松前藩屋敷で晴天の中、会のご一行様をお迎えできましたことは、望外の喜びでした。その後、諸行事も予定通りスムーズに運び、前田新町長、齋藤町議会議長、疋田観光協会会長三役お揃いにての宴会、翌日、休日にも拘わらずお出迎え頂きました村田福島町町長、千代の山・千代の富士横綱記念館をご案内を頂いた、島町企画財政課の星野主査様に心より厚くお礼を申し上げます。

総じて、この度の「道南歴史の旅、松前／福島編」は5／7、8両日とも終始好天に恵まれ、無事終わることが出来ましたことは、この会を陰ながらお支え下さいました方々の賜と、茲に改めて心深く感謝致しております。世話人として、また、旧松前藩主家代表として厚く御礼を申し上げます。

春の道南 4 日間の旅・日録

西井 易穂

春の道南 4 日間の旅が米欧回覧の会で企画され、2004年5月7日から10日まで、石川直義会員と郵船トラベルのお世話で実施、総勢 25 人が参加した。松前では第 2 3 代当主松前孝廣さんが案内役を兼ねて参加、総勢 26 人とすべきか。賑やかな親睦会としても意義の深いものであった。

東京 → 松前

5月7日

7 時羽田空港 C カウンター前集合と案内されていたので、時間前に充分、余裕を見て、羽田に着くようにでかけ、一階で軽食をとり、2 階 JAL C カウンター前に行き、旅行社郵船トラベルの係員あるいは標識を探すが、見当たらない。誰か顔見知りの人はいないかどうかろうろしていると一人の婦人が“西井さんですね”と声をかけてくれた。集合場所が A カウンターに変更になったという。もう、7 時をまわっていて、端から端まで、A カウンターに急いで移動すると水沢さん始め、見慣れた会員の姿を認めてホットする。

セキュリティチェックを済まし、機内の人となる。33G 席を占める。右隣に小野博正さん、その隣に水沢さんが席を占めた。

函館空港に向かう途中、小野さんと祖父西井格太郎の履歴の話、解体新書異聞：梅毒と

水銀に関する私の最近の調査内容の話をした。小野さんから、今日の日経新聞に奈良の大仏建設には多量の水銀が使用されたとの記事が載っていたという情報を得た。話が弾み、気が付いたときには函館空港への降下体制に入っていた。

空港構内に降り立つと、そこには泉先生が普段とは異なっていたいでたちでおられ、バスガイドが待っていた。渡島交通のバスに案内された。運転手が佐藤浩一さん、バスガイドが岩崎由加子さんという。耳にやや響きすぎるエネルギーな説明を聞きながら函館空港から松前へ向かった。

海岸沿いに土方歳三、石川啄木記念館が見え、その前を通過、ガイドさんが、札幌は昨日開花宣言があったと説明してくれた。通常松前のサクラの開花は札幌より一週間早いので、今日は多分素晴らしいサクラを楽しめるだろうと嬉しい話。期待に胸が膨らむ。

バスは北大の水産学部前を通る。新入生は札幌で半年間過ごした後にこの学舎に移ってきて勉強するとのこと。

洞爺丸慰霊碑前を通過するとき、岩崎さんが、洞爺丸沈没の解説を始める。

昭和 29 年 9 月 26 日 (日) 台風の中、台風の目に入り、これなら大丈夫と出航した洞爺丸

は出航直後、強風を受け、横転し沈没したという。死者 1175 名に上り、その死体は八重が浜に累々と打ち上げられた。

当時、水沢さんはNHKの新入社員としてたまたま札幌に勤務しており、札幌から函館まで、駆けつけ、その状況取材したとの補足説明があった。

私が生化学の基礎を指導した故尾野雅義君の父親がこの洞爺丸事件で死亡し、学生時代彼が大変な苦勞をしたという彼の話が蘇ってきた。その事件が、彼の精神的強さに繋がっていたことを改めて鮮明に思い出した。彼は持ち前の負けず嫌いと言ったと逆境を乗り越えた経験から、中外製薬の主力製品、エリスロポエチンすなわち増血剤エポジンの研究開発の中心的人物に成長した。残念ながら、勤務中に研究所内で急死した。

やがて、バスは函館戦争の激戦地である矢不來を通る。地名の由来は官軍の船から射た矢は幕府軍の陣地に届くが、幕府軍から射た矢は敵方の船に届かなかったことから矢不來と名付けられたというガイドの話だが、実際には矢でなく鉄砲や大砲の射程の問題で、矢不來はそんなに新しい地名ではなくアイヌ語由来である。

ここ津軽海峡に面した海岸ではホッキ貝がたくさん取れる。バスは茂辺地川という大変美しい浅い流れの川を通過する。秋にはこの川に上ってくるサケの姿がバスからでも見えるそうだ。“るいべ”というのはサケの半氷

結晶で大変美味しい食品のこと、また、石狩なべにしたり、チャンチャン鍋の材料としたりこの地方には欠かせない食品である。

当別町に入り、トラピスト修道院への道を右手に見て説明を受ける。トラピスト修道院は明治29年に設立された男子修道院で修道院の皆さんは自給自足の生活をしている。女子修道院はトラピスチヌス修道院と言って函館市内に存在する。

左手の海岸を見ると引き潮時で、岩肌が露出し、海水の溜まり水が諸所に見え大変美しい。何人かの人々がなにやら採集している姿が眺められる。逃げ遅れた子魚などがたくさんいるのだらうと興味をそそられる。この辺りではハマグリ、ツブ貝の汐干狩ができるのだそうだ。

上磯町を過ぎ、木古内町に入って行く。孝行モチというのが、有名との説明はあるが、咸臨丸がここのサラキ岬沖に沈没していることの詳細な説明を期待していたところ一言も説明がなかった。参加者の皆さんは歴史に興味のある人ばかり、お節介とは思ったが、補足しておいた。

昨年、函館市内から咸臨丸のことを思いつ、この周辺の景色をスケッチした。鹿児島県南部の山川港にて咸臨丸艦上勝海舟と島津斉彬公が日本の将来について対談し意気投合し、江戸城無血開城の伏線をなしたことを思い浮かべて描いた。その絵と一対になる色調でサラキ岬沖の絵が仕上がり、自己満足のい

くスケッチであったなど懐かしんだ。

さめ川の前を通る。ここはみそぎ祭りで全国的に有名なところ。4名の男子がご神体を担ぎ、厳寒の1月17日に海に入り、ご神体を清める神事が行われる。テレビで見た光景を思い浮かべる。この神事を滞りなく済ますことによって、その年の豊作、豊漁が続くという謂われがある。天保2年に神主がそのようなお告げを得たということで、それ以来続いている神事であるとか。

やがて知内町に入ってくる。この辺りではマコカレイがたくさん取れる。また、ホテルが美しいところでもあり、知内温泉があるという。知内の語源はアイヌ語の「チリチオ」から来ている。チリチオとは鷹のことで、昔からこの地方には鷹がたくさん生息していたことから名づけられた地名である。

知内川のほとりに一際目立つピンク色の壁を持った3階建ての一軒が見えてくる。これは北島三郎の実家で、弟が小野運送店というのを経営しているのだとのガイドさんの説明に皆さんの視線がその家を追う。この川にも秋にはサケが上ってくる。北島三郎は函館西高等学校にここから列車で函館まで、二食の弁当を持って毎日通学していたとガイドさんの説明が続く。

しばらく走ると青函トンネルの入り口が見えてくる。青函トンネルは函館と青森を直接つないでいるのではなく、ここ知内と龍飛崎の龍浜を結んでいる。昭和60年に着工し、

平成3年に開通した海底トンネルで、北斗のほか、ドラエモンという名の列車も走っている。海底140m、全長54km。現在八戸から函館を結ぶ新幹線建設の企画があり地元の人々から期待されている。

松前観光

やがて、バスは目的地の松前に到着した。第23代当主の松前孝廣さんが出迎えにきていて、ビデオ撮影をするというので、下車のやり直しをして、バスから下車する光景をビデオに収めた。松前は元城下町であるとともに、人口約10000人の漁業の町である。

藩屋敷の見学をすることになった。以前ここを訪れたときはもう夕方5時近くになっていて、中に入ることができなかった。武田菱の幔幕が架けられた門を抜け中に入った。この機会に中をゆっくり見て回りたいと思った。

昼近くなので、まず、武家屋敷で昼食をとるという。武家門、武者堀に囲まれた広大な屋敷である。松前さんのお陰で、普段、上がることも難しいのであろうが、そこで特別料理をいただけるとのこと。座敷には見事な刀、鎧に立派な屏風が見て取れた。風が強く、襖を開けた位置に座っていると表から吹いてくる風で寒い。襖の陰に座席を占めて、食膳がくるのをまった。食膳は1860年に京都からお姫さまを迎えるときに出された祝い膳とか。今のレベルからみれば、それほど豪華なものではないが、大変なご馳走である。一汁一菜が庶民の食膳である当時としては破格の祝い

膳であろう。しかもこのような厳寒の土地でこれだけの食材を準備するのは大変なことであったろうと思いつつながら味わった。なかなか美味しいもので満足した。

藩屋敷に入ってくる時入り口左手に武士の人形が飾られている関所跡があり、ゆっくり見たいと思っていた。幸いなことにここで松前市の観光課長から詳細な説明を受けることになった。この時代、普通は知行すなわち米穀の産高で藩の財政が賄われるのであるが、ここ松前では米が取れないので、知行でなく蝦夷地での交易の独占がみとめられていた。そこで、沖ノ口奉行所という関所が設置され、蝦夷地に出入りする船、荷、人を取り締まったところである。ニシン、サケ、昆布、アワビ、など海産物、材木などの船積荷に税金を掛けて藩の収入としていた。その関所がこの沖ノ口奉行所である。

藩屋敷跡を後にして、松前藩の菩提寺に行くことになった。菩提寺内にある大きなイチヨウの木に目を見張った。その脇にほかの墓とは趣きを異にした普通の墓石が4基ほどあったがこれは初代から4-5代までの、藩侯たちの墓石で、他の墓はすべて石造りの屋形風覆屋に収められた墓であった。これらは重要文化財の指定を受けているユニークなものである。全体で55基あり中には側室の墓まであるのには驚いた。椿姫の墓と刻まれている一際立派な墓が気になった。ここではかなり詳しい説明が観光課長から続き、松前さんが、

これ以上ここにいと私が引っぱりこまれるので、もう行きましょうと我々を促した。

松前さんは、皆さんを迎えるというので、昨夜、雨は降らないだろうか桜は満開だろうかと心配で何度も目が覚め、十分睡眠も取れず、今朝早く起きて、ここで一番すばらしい桜が咲いているかどうかを見に来て安心したとのこと。幸いにも血脈と呼ぶ桜は満開で、少しでも早く皆さんに鑑賞していただきたいと何度も何度も、念入りに自慢されていた。いよいよその血脈を見に行くことになった。ここには250種、1万本の桜があり、まだ、種類が特定されていないものも何本かある。それらに名前は付けられていないが、それ以外のものには名前がついているとのこと。南殿(なでん)という種類の桜で血脈と名付けられた古木が光善寺の庭園にある。光善寺に至るまでに、なるほど素晴らしい桜の並木というより桜の森を見ることができ、そのピンク色一式に展開した森の先に青い海原が目を楽しませてくれた。しばし、桜の森越しに海の景色に見とれる。法源寺、法幢寺、竜雲寺、光善寺と訪ね歩く。その光善寺になるほど見事な桜の木があった。これが、血脈かと改めてその素晴らしさに見惚れた。松前さんが自慢するだけのことはある。今年芽生えて延びてきたその枝に白い花がついて、やがて、ピンク色に変化し、最後は赤色になって散っていく桜とのこと。今は満開で白、ピンク、赤すべての色が混じりあった状態で最高の見頃

時期であった。このような花の成長の在り方を始めて知った。この桜には古い言い伝えがある280年の樹齢で、松前の神木ともいえる。昔、寺の住職が見晴らしを良くしようとこの桜を明日、切ることを決めて、血脈という極楽浄土への道を説く経を唱えているとき、一人の娘がそこに現れ、一緒にお祈りをしているの、終わったとき、その娘にお札を授けた。その翌日庭の桜の木に何やら白いものがみえるので、良く見るとそれは昨夜、娘に与えた血脈のお札であった。さては昨夜の娘さんはこの桜の木の精であったかと気づき、その桜を切ることを止めて、今のようなみごとな桜の花を付けるまでにいたった。

血脈とは“桜の木の精が極楽浄土に行く証文”という説明文が書き記された板がその桜の木の前に立っていた。ふと亡き母のことを思い出した。

母恩ぶ 南殿の花や 光善寺

水沢さんに確認すると南殿だけでは季語にならないとのこと。そこで、血脈を「南殿の花」としてみた。

血脈のほかにも竜雲院のエゾ霞桜、法源寺の数珠掛桜、阿吽寺の糸括、雨宿とか名付けられている素晴らしい桜を十分に堪能した。これほど見事な花の時期に、松前を訪れることができたとは今回の旅は誠に優雅な旅になったものだ満足した。

続いて、松前城を見学することになった。城の庭園はサクラが満開で、海の眺めも最高、

城壁には戊辰戦争のとき、海から銃撃を受けた穴をところどころに見ることができる。

城は資料館になっていて、入り口を入った右手に松前の俯瞰図が描かれている大きな屏風が展示されていた。松前の絵師小玉貞良の筆になる。宝暦年間当時の町並み、商家の状況をつぶさに見て取ることができる。この絵について詳細な説明を受けた後、自由参観となる。長者丸の幟はまことに立派なものである。蠣崎波響の絵は迫力があり素晴らしい。

12世資廣の第5子で、松前応挙とも称された人である。特にアイヌの酋長を描いたものは見るものを引き付けずにはおかない。金子陽亭先生の書が飾られていたが、その価値の評価は私には出来かねる。明治39年生まれ、文化勲章を受賞した著名な人で平成13年に没したとのこと。たくさんの1分銀が展示されていた。これ4枚で1両との説明書きがある。1両10万円として大変な金額に相当する。日銀の正式報告書によると1両は4万円とする説と40万円とする説があるが、10万円として計算するほうが、我々には抵抗がない。6万円の説明している書籍も見られる。そのような会話をして、私は皆さんより少し早く城をあとにした。庭から櫻と松前城の景色を5分ほどスケッチしたが、完成する間もなく皆さんが出てきたので、城を後にすることにした。

ホテルに入る前に龍野屋さんという変わり者の店主が開いている店に寄ることになった。

店舗は当主のガンコな気質から、松前城下にマッチしたいかにも古めかしい造りを踏襲している。古風な調度品や絵をそろえた風格のある店である。ここは松前漬の総本舗で、当主の工夫になるという珍しいサクラアイスクリームをいただいた。大変良い味をしたアイスクリームで満足した。関山のサクラを使用しているという。

海岸に出ると舞い落ちたサクラの花が一角に流れ集まり、ゆらゆらと波に揺られている。そこにかもめがやってきて何やらつづいている姿がなんともどかで、またもや血脈桜の素晴らしさを思い起こした。

光善寺 血脈舞いし 極楽や

松前に 南殿のふぶき かもめ舞う

おや、季語がないのかな？素人の俳句か川柳かといった作品かなと思ったりする。皆さん店を後にして出揃ったので、矢野旅館に入る。

ロビー展示ウインドウには松前家家臣装用品が展示されていて、そこに松前孝廣さんが書いた色紙が飾られていた。その隣に高田嘉七さん、ゴロウニン、リコルド署名入りの色紙を見出し嬉しくなった。嘉七さんとは古い飲み友達で、以前妻とともにこの地松前まで車で案内してもらったことがあったが、そのときには時間がなく、通り過ぎるに近い観光に過ぎなかったのであるが、図らずも今日はこの旅館に宿泊できる。

函館の歴史郷土館の理事長をやっている高田屋嘉平衛七代目の嘉七さんが以前良く話

しをしていたことを思い出した。彼は自費で私的に北方領土返還活動をおこなっているのだ、近い内に八代目のゴロウニンを函館に招待するのだなどと話をしていた。そのころ、かれらもこの矢野旅館に泊まったときにこの色紙をかいたのであろうと思い同じホテルに泊まれるとは嬉しい限りであると思ったりした。日本種痘の鼻祖中川五郎治診療所跡の板看板が展示されていた。江戸後期の医者でシベリアに拉致されたとき、牛痘接種の法を学び、文政年間に北海道で種痘を実施した人物である。そのときの種痘所の表看板なのであろうと興味を惹かれた。

部屋は梶春治さん、阿部修二郎さんと同室で風呂に入った後、夕食の宴会場に向かった。夕食会は松前さん、岡本順一総務課長の司会で始まり、前田一男町長の歓迎の挨拶、斉藤勝町議会議長の乾杯で賑やかに行われた。松前さんはなかなかの交際上手で町内の中枢人物を十分把握しているようだ。皆さんの挨拶がすみ、食事を楽しんだ。月島奴保存会の皆さんによる郷土民謡、踊りなどが披露されたりした。思いもしなかったことだが泉代表、水沢さんまでが歌を歌い大変賑やかな晩餐になった。元ケニア大使の佐藤ギン子さんが歌が上手なので驚いた。足田清美観光協会会長の万歳三唱で終了した。

食事が終わり、同室の連中は、部屋に戻って、すぐに就寝したのであるが、後で聞いた話によると泉さん、水沢さんほかかなりの

人たちが一緒に、お酒を片手にしてお城で夜桜見物を楽しんだとのこと。大変素晴らしかったという話に私も参加したらよかったのにと悔やんだ。

松前 → 函館

5月8日

矢野旅館を8時30分に出発して最初に横網記念館に立ち寄ることになった。途中バスガイドさんから北海道のコンブの消費量最大地が沖縄であることの説明を受け、驚いた。福島町の横網記念館に到着した。ここは千代の山、千代の富士、二人の横綱を生みだした故郷である。入り口階段の両脇の石壁に二人の入幕から横綱になるまでの経緯が刻まれている。正面に二人の逞しい彫像が据えられていて、この前で全員の記念写真をとった。入り口受付に千代の富士のお姉さんの姿が見える。なるほど、ガイドの岩崎さんがしきりに誉めていた小柄の美人である。記念館内部は参加者全ての人の興味を引くものがいろいろ展示されていた。優勝祝杯の数の多さに改めておどろいたが、千代の富士着用の横綱、太刀、チョン髷に目を見張った。千代の富士が国民栄誉賞を授与されたときの首相が海部俊樹であったことを再認識するとともに、千代の富士の本名が秋元貢であることを知った。千代の富士の展示室に比較して千代の山の展示室の内容はやや寂しいものこれも見ごたえのあるものであった。稽古部屋が復元されていて、その土俵の大きさに驚いた。その前

で写真を撮った。出口脇に平成2年1月場所で優勝したときの千代の富士に毎日新聞社から送られた大きな絵看板があった。

この記念館でかなりの時間を費やして観賞したのち、バスに乗り込んだ。目の前に姿形の良い木が一本すくと立っているのが目に入って一人で頑張った千代の富士を思い起こして、バスが発車する前



すばやくスケッチしておいた。ガイドさんが北海道独特の方言の説明をしてくれた。ボッコとは棒のこと、チョスははいじるという意味で髪、毛をチョスとか机をチョスとかいうように使用される。コワイは疲れる。ナゲルは捨てる、ザンギは鳥のから揚げのことだそうだ。この辺りの屋根は雪が滑りやすい構造になっている住宅が多いことを見てくださいという。やがて、湯の里、知内川を過ぎトラピスト修道院に立ち寄ることになった。この辺りは男爵藩を作り出した川田竜吉が育ったところでもあるという。

バスをおり、美しい修道院入り口まで、皆さん急な階段を登って見学にかけたが、私は以前に来たことがあるので、階段下でスケッチをすることにした。まだ、スケッチが完成しないうちに皆さんが戻ってきたので、バスに乗り、揺られながら、スケッチの補修作業を行った。

そのうち、アサノセメント越しに函館山が見えてきた。アサノセメントのベルトコンベ

アーが海に突き出ているこれは1 kmにも及んでいる。その先からセメントが船に積み込まれて出荷されるのであり、最盛期のこのあたりはさぞかし、大変賑やかなことであつたらうと想像する。

函館市内に入ってくる。函館山からみて、右が大森海岸、左が函館港で150年ほど前にはこの港にペリーが来航している。函館山麓にある五島軒で昼食になった。館内は内容の濃い私設資料館になっていて食事に来る人の興味をそそる。何回も函館にきているが、こんな素晴らしいレストランがあることを知らなかった。迷路のような回廊と階段を上り、当時を偲ぶ古風な洋式風の部屋に案内された。ここで、昭和天皇も食したというカレーライスをいただいた。

昼食をすましたのち、観光客憧れの元町を散策した。往時の西洋文化を色濃く残す異国情緒豊かな街並みで、坂がおおく見晴らしの良い所である。北島三郎が通学したという函館西高校を過ぎ、カトリック元町教会、函館ハリストス正教会、聖ヨハネス教会と見て歩いた。ハリストス正教会聖壇の前で宗教論など交わして、少々不謹慎であつたかなと反省しながら、そこを後にし新旧函館区公会堂前にでた。ここは相馬哲平旧宅で、当時5万8000円を懸けて建築した素晴らしい建築資産である。偶々、ここで結婚式を挙げたらしい新郎新婦が前庭をあるいていたので、シャッターをきろうとしたが、間にあわなかった。

残念ながら中を見学する時間がなく外観のみを鑑賞する。元町から下方に見える函館港の景色は素晴らしく皆さん自分をモデルにして写真にその景観を収めていた。公園内にある四天王像を見て、元町を後にする。

武田斐三郎が安政4年に着工し、7年の歳月を掛けて構築した西洋式の平城、五稜郭に着いた。榎本武陽がここにエゾ共和国を設立することを夢みて立て籠もつたが遂に官軍に敗れた戊辰戦争最後の激戦地である。そのとき、高松凌雲は幕府軍、官軍の負傷者を差別することなく治療を施行した。パリのオテルデューで学んだ赤十字思想を実施した所として歴史上、記念すべき場所でもある。そのような訳で、ここの資料館には高松凌雲縁の遺品類が展示されている。その記念館前に幕府軍が用いた大砲と官軍が用いた大砲が並んで設置されている。玄関前の枝垂桜がみごとであった。



五稜郭展望台は以前何回も上っているので、私はスキップして、ここの景色をスケッチすることにした。

瞬間に時間は過ぎ、色づけをする間もなく、皆さんがもどってきた。諦めて後片付けを急ぎ集合時間ぎりぎりにバスに乗った。ホテルに行く前にトラピスチヌ女子修道院に立ち寄ることになった。広くて気持ちの落ち着く修道院前庭を楽しむことができた。その

中心には両手を広げた珍しいマリア像の立像があった。キリストを抱いているのが普通であると思うが、この像は来院する全ての人を抱擁する姿勢を示しているのであろう。残念なことに、十分時間が取れず、いかにも慌しい前庭のみの見学になった。

湯の川温泉街にあるホテル平成館に入った。道が込むというので、食事を簡単にすまし、函館山からの夜景見学に出かけた。途中心配したほどの混雑もなく、函館山の頂上に着いた。標高334m。さすがの人気スポットで見晴らしのきく場所を確保するのに右往左往する。満足のいくビューポイントにしばしたたずむ。風爽快、天気も上々、最高の季節に訪れたことの幸せを感じる。随分昔に訪れたことがあるが、ここからの夜景は何回見ても飽きることがない。誠に素晴らしいものであった。時間の立つのを忘れしばらく見とれていた。

ホテルに戻ってからカラオケバーに行った。水沢さん、泉さん、梶さん、小野さん、古後さんとで、楽しく何曲も歌った。皆さんそれぞれ個性が強くなかなか味のある競演となった。あとから参加する人を心待ちにしていたが、誰も現れず、歌い疲れ、満足したので部屋に戻って寝ることにした。

函館 → 小樽

5月9日

朝食を済まし、8時20分にホテルを後にした。今日はひたすらバスで約400kmの道

のりを函館から札幌、小樽まで移動することになった。

長万部までが約100km。途中で、姿形の良い1131mの駒ヶ岳がみえる。右手に小沼があり、ここは水芭蕉の群生地であるという。水芭蕉のことを北海道では「ベコの舌」という。左手にじゅん菜沼があり7月上旬にはじゅん采がたくさん収穫できるとのこと。駒ヶ岳は60年サイクルで噴火するといわれ、昭和4年の噴火では2人が死亡し、昭和17年、昭和64年(平成元年)に小さな噴火が見られたが、そろそろ本格的な噴火があることが危惧され注意をしているところだとバスガイドさんの説明。砂原岳、剣ヶ峰が見え、4つの峰がウサギの耳に見える位置に来た。道路脇のさくら街道は満開で素晴らしい。この辺のさくらは染井吉野が中心。「オニウシ公園」の樹木は鬱蒼と茂っている。バスは快適に進行し、鷲の木海岸脇を通過、内浦湾が見える。榎本武陽率いる旧幕府艦隊が最初に上陸した土地である。やがて八雲町にいたる。昔山越の関所があったところ。山越駅は無人駅であったが、その駅舎は誠に重厚な駅舎で往時の関所を彷彿とさせる。ユーラップ川を過ぎる。ユーラップとは気温が低くなるという意味合いで、ここにもサケが昇ってくる。多くの牧場が見え始める。この辺りの牛はホルスタインで乳牛である。肉牛はあまりいないとのこと。やがて、山崎牧場に達する。ここはサラブレッドの生産牧場として有名で競

走馬でヤクモと名のついているものはすべてここで生産された馬である。たとえば、ヤクモアサカゼ、ヤクモレインボーなどが有名である。間もなく長万部に入ってくる。カントリーサインは「あやめと毛ガニ」である。湿地帯であやめの自生地。昔は川から砂鉄が取れたのであるが、今では川が無くなり、湿地帯になっている。学生時代にここのアイヌ部落を訪ねたことを懐かしく思い出す。

有珠山が見え始めた。西山噴火口が山麓にあり微かに煙が流れている。羊蹄山は蝦夷富士とも呼ばれている。虻田洞爺湖越しに昭和山が見えてくる。昭和18年、19年5月、6月に噴火したときに隆起してできた山で昭和山と名づけられた。昭和20年9月安全宣言が出された。噴火後お湯の産出量が増え、湯の温度が上がったとのこと。昭和山が眺められる洞爺湖脇のレストラン「民芸御殿戸田観光」で昼食をした。ここで、昭和山をスケッチしようと考えていたが、少々、飲みすぎたのと時間がなく諦めて、バスに乗った。バスは洞爺湖を巡るよう到来道を引き返した。洞爺湖の周囲は43km、水深197mのカルデラ湖で湖中には弁天島、饅頭島、観音島、大島の4つの島が右手湖中に見える風光明媚な湖である。おおくの観光客が毎年訪れて来るところで、テレビのドラマにもよく登場する北海道有数の観光地である。過去、何回か訪れたことがあるので少休止の昼食をしたということでまあ満足しようと、自分自

身を納得させて洞爺湖を後にした。

中山峠に残雪が見える。このあたりではフキノトウの後に出る姫竹の芽をよく食べる。腹も一杯、バスに揺られているうちに、疲れもでてきて気持ちよく寝てしまった。

ふと気が付くと札幌の水源地豊平峡ダムが見え、定山溪温泉街に入っていた。ここのイメージキャラクターは河童とのことである。バスの右手、とある温泉宿の玄関先に河童の彫刻が飾られ、噴水が噴き出しているのが見える。しばらく走ると平らな屋根をした家並みが見え、雪国なのにどうしてなのだろうと思った。ガイドさんがこの屋根は不落雪屋根と言い、屋根の上にV字型の溝が彫られ、降った雪は常に水として流れ落ちる仕組みになっているとの説明。最近、札幌近辺ではこのような屋根を持った家が盛んに建てられるようになったとの話であった。

真駒市内に入った。新札幌副都心駅近くに札幌青少年科学館が見え、北海道開拓記念館でバスを降りた。記念館館長の山田さんが出迎えてくれて館内に案内され、記念ホールで詳しい説明がなされた。本記念館は北海道開拓百年を記念して昭和43年着工し46年に一般公開された記念館である。玄関のグランドホールは高さ12mに及ぶレンガの壁と一大空間が目を見せ、北海道ならではの雄大さを誇っている。記念ホールには札幌の文化向上に貢献した人々の顔写真が両方の壁に飾られていた。見知った人物を幾人か認識しえた。

正面には重さ200kgの豪華な織物の壁掛けがぶら下がり、後ろ壁面には農地の開拓に活躍した馬の蹄鉄でできた飾り付けが壁一面になされ誠に見事なものであった。正に北海道百年を記念するにふさわしい開拓記念館である。中を見学して廻ったが自然と歴史に焦点をあてた民族博物館であり、マンモス像の化石による復元、旧石器時代、縄文文化の遺品を集め、アイヌの生活のみならず北海道における近代、戦後、現在の文化を理解するのに格好の学習館の様相を呈し、開拓記念館というより総合歴史博物館といった方が相応しいようである。最初に開拓記念館と名づけた経緯とさまざまな要因で、いまさら名前を変更することがかなり難しいとの館長さんの話があった。偶々、松浦武四郎特別展が開催されていて興味深く拝見した。松浦武四郎は伊勢三雲町出身、私と同郷の士であり北海道という名称を提唱した名士として私には馴染みがあり以前から一度調査をしてみたいと考えていた人物である。この特別展をみて、彼がそれ以上の当代随一の蝦夷通であることを認識するとともに、趣味の人であり素晴らしい絵や書を残すとともに書画骨董を集め、広く文人や画家との交流を深めた一級の文化人であることを知った。玄関売店に彼に関する本が何冊もあり、その中から松浦武四郎時代と人々、知床紀行など数冊を買い求めこれから彼の調査を深めようと考えた。改めて松浦武四郎の偉大さを認識することができて、満足

するとともに嬉しかった。

記念館を後にして小樽に向かった。北海道には何度も来ているが、今まで小樽には立ち寄ったことがなかったので、今回小樽に一泊できることは私には大きな価値があり、期待していた。ヒルトン小樽に入って、夕食まで、1時間ほどあるということで、期待の小樽倉庫街の観光にタクシーで出かけた。なるほど興味深い街並みである。ホテルでの味気ない食事をするより、この雰囲気の中で、食事をしたほうがどれだけ素晴らしかったのにとぶつぶつ言いながら夕刻の赤レンガ造りの倉庫街を散策した。この運河は幅40m、長さ2kmもあったのが、今では約その2分の1ほどの規模に縮小され保存されている。ガス灯が揺れる情緒豊かな倉庫街で今すこし、のんびり散策したかったが、時間がなく、ホテルに引き返し食事をとった。

小樽 → 札幌

5月10日

今日は道南4日間の旅の最終日。ホテルを後にして、裕次郎記念館を海よりの右手にみてニシン御殿に向かう。道路脇に真っ黒になった残雪の柱が林立している。

残雪の連なる柱 黒化粧

といったところか。ニシンはこの4、5年前から戻り始めて町の人々は往時の繁栄振りが舞い戻らないかと期待しているとのこと。

ニシン御殿としては昭和30年代に30万円を要して建てられた青山御殿という建築物が

素晴らしく立派なのであるが、今日は時間の都合で、青山御殿には寄らず、水族館右手のニシン御殿に行って見学することになった。バスを降りたところ潮風に乗ったニシンの臭いが鼻をつく。昔はこんなものではなかったとのこと。そこに古い特徴のある建物が目につく。これは旧白鳥番所跡であり、そこから左へ丘を少々登っていくと海が一望できる見晴らしの良い場所に大きな木造のニシン御殿があった。中に入り見学した。玄関右手は網元の家族が生活していた部屋で誠に立派なものである。それに反して左手奥に漁夫たちが寝泊りする棚3段の雑居部屋があり、好対照であった。今の時代ならとても許されないところである。ここに何百人もの漁夫が寝泊りしたのかと驚く。台所は大変大きく立派なもので彼らの食事を準備するに相応しい規模であった。また、彼らが用いた興味ふかい食器やら漁具の類の調度品が沢山展示されていた。立派な二階座敷もあり、その奥には隠れ部屋が設置されていた。今は剥きだしになっていてその隠れ部屋を直接見ることができるが、もともとは押入れの後ろ側になっている屋根裏部屋で、不漁のときなど借金取りが来たときに当主がここに隠れたということである。

すしや横丁を通り、とある店屋の前でバスがとまった。カニを食べてくださいと店の人がバスの横にカニを片手に立っていた。なかなか商売上手である。味わってみたが、なかなか美味しい。ここで、お土産に毛蟹をはじ

めいろいろな海産物を買ってくださいということで、ほとんど全員の人が何がしかの買い物をした。隣の店主が恨めしそうにこちらを見ていた。

バスは順調に札幌へ向けて走った。11時丁度に札幌時計台の前を通り、幸いなことに11時を知らせる鐘の音を聞くことができた。この時計台は明治11年に建物が建築され、13年に時計が設置され、今でも立派に動いているとのこと。

やがてバスは札幌ビールのファクトリーに到着した。想像もしなかったほど現代的な商店街になっていて期待はずれの感である。中央広場に立派で魅力的なビールの蒸留塔が設置されていた。この商店街の一角にある麦羊亭でジンギスカン焼きを頂いた。ビールはさすがに美味しかった。

食後、道庁赤レンガ庁舎2階会議室で、映像が語る岩倉使節団・米国編を見たのち、泉代表から「岩倉使節団とフロンティア・スピリット」の話、田中彰先生から「岩倉使節団の今日的意義」についての講演がり、終了後庁舎横道路を隔てたレストランで夕食会が行われた。残念ながら田中先生は出席されなかった。バスにのり空港に向かう。この段階になって心配していた雨が降り始めた。今回の道南4日間は毎日好天に恵まれ、個人で行く旅行とは一味違った内容の濃い充実したもので最高であった。

完

田中彰氏の講演『岩倉使節団の今日的意義』要約

当会の今回北海道旅行の目的の一つは、岩倉使節団を紹介する当会製作のビデオ、当会主宰の泉三郎の講演、岩波版『米欧回覧実記』の校注者で、北海道大学名誉教授である田中彰氏の講演をセットとした講演会によって、日本の近代化にかけた当時の日本人の心意気を偲び、岩倉氏使節団の果たした役割の意義を、北海道の人々にも広く知らせることにあった。この講演会は北海道開拓記念館との共催、北海道新聞社ほか地元文化団体後援の形で5月10日午後、由緒深い赤レンガの北海道庁旧本庁舎（国の重要文化財）2階の大会議室において開催された。参加者は180人以上に達し、補助席を出すほどの大盛況であった。田中氏の講演の要旨は次の通りである。

「明治の初期に米欧に派遣された岩倉全権大使を中心とする大使節団の行動は、大和朝廷時代や平安時代に行われた遣隋使や遣唐使に匹敵する、国家的課題を背負った大使節団であった。彼らは条約改正に関しては失敗したけれども、さまざまな角度から欧米の制度や実情を調査し、日本の近代国家作りに色々な貢献を果たしている。そのことは、『米欧回覧実記』の記述を克明に辿ることによりはっきりと証明できよう。

私はまた、彼らがこの旅を通じて、日本が近代国家のモデルとして、大国路線を取るべきか、小国路線を取るべきかの選択を試み、久米の記述は小国路線の有効性についてかなり重点を置いているのではないかと考える。

たとえばスイスの国是についても、「スイスは自国の権利を達成し、他国の権利は妨げず、自国の権利を他から妨げられない」ことを目指しているとして、その立場を高く評価し、ベルギーやデンマークの国としてのあり方についても、深い関心を示している。その当時、こうした国々をモデルとして近代化する事も、大きな選択肢であったろう。しかし、結果としてその後の日本は、小国路線を捨てて、プロシヤを追いかけるように大国路線を走ってしまった。中江兆民も言ったように、使節団は「始めは欧米文明に驚き、次いでそれに酔い、そしてついにはそれに狂った」のである。しかし、それが必ずしも日本にとっても世界にとっても幸せな道でなかった事は、歴史が証明するところであろう。日本はまず軍事大国たろうとし、富国よりも強兵を先行させるべきだと考え、富国はむしろ強兵によって勝ち取るべきものだと考え、かつ、行動したのである。

ところで、こうして強兵・富国・大国主義の道をいっさんに走った日本も、大正デモクラ

シーに際しては、ややその歩を緩める姿勢を見せている。私はそこに、かつての小国主義路線のある種の影を見る事ができると思う。また、敗戦後の日本人が、GHQから「与えられた」かたちとなった平和憲法に一も二もなく飛びついたこともまた、かつて有力な選択肢として考えられていた小国主義路線の伏流がここで噴出したものであると見ることも出来る。私は考えている。

日本は明らかに戦後は軍事小国でありたいとし、あろうとして来たのである。ところが今の政府の動きなどを見ると、またもや軍事大国への道を取ろうとしているのではないかとさえ思われる。今こそ私は、日本が小国主義路線を取ることを改めて考え、慎重に行動して行くことが大事なのではないかと考える。」



北海道庁旧本庁舎 撮影 橋本

スナップ集

浅生 庸子



松前の海



桜・さくら・サクラ



松前の海を観る水沢周さん



松前城と佐藤ギン子さん



トラピスチヌ女子修道院前にて

西井易穂さん



横綱記念館にて

左から

岩田さん 小野さん 浅生 澤本さん

千代の富士のお姉さん 松本さん 阿部さん

北海道への愛着

阿部 修二郎

松前のみごとな桜が、今も脳裏に浮かぶ。本当にすばらしい旅行だった。すてきな方々と、ふるさとを訪れることができ、感謝している。とくに、石川さん、松前さんには、大変お世話になりました。

私は東京に生まれ、小学生のときに新潟県から札幌に移り住んだ。高校卒業後は東京の大学に進み、東京の放送会社に就職して、首都圏に定住したが、北海道の土地柄に愛着をいだき、両親のいる札幌を自分のふるさとと考えてきた。だが、会社づとめの間はゆっくり休暇をとることもなく、道内各地を旅行する機会は少なかった。今回、道南歴史ツアーに参加し、観光客の気分で北海道の歴史をたずねたことは、新鮮な感動を与えてくれた。前から行きたかった松前を一番美しい季節に訪れ、最高の歓待にあずかったのは、稀有な幸運だったと思う。1万本の桜が咲ききそい、古刹が静かに立つ城址一帯をまわり、紺碧の海をはるかに望み、再建された天守閣で最盛期の城下の絵図を見ると、江戸時代、蝦夷地の中に京都の文化を取りこみ、幕府体制の北の拠点として栄えた松前藩の存在が実感された。札幌に育ち、そこでの知識経験から北海道史を描いてきた私は、大切な部分の空白を補うことができた。松前町の人々の、さわや

かな心意気にも感動した。

函館は、学生時代、札幌―上野間を汽車と船で行き来したころ、何十回か通過した町だ。あのころは、猛吹雪や台風で連絡船が欠航し、港に足止めされたこともあった。函館は、幕末・明治初期から道内で一番栄えた町だが、元町の教会群のたたずまいや、函館山からのみごとな夜景など、今もこの町は輝いている。

札幌に向かうバスから見た道南一帯の風景は、学生時代に汽車で通ったころより、どこか活気に欠け、さびしい気分になった。一泊した小樽にしても、歴史的な建造物が今に生かされ、新しい魅力も加わったすてきな町だが、昭和30年代に20万人近かった人口が今では15万人を切ってしまった。その間に私の住む茅ヶ崎の人口は7万から22万に増加し、首都圏はふくらむ一方だ。日本の変わりようは、いびつなところがあり過ぎたと思う。

札幌に入ると、町のいたるところに思い出があり、バスから外を眺めるだけでも、さまざまな感慨が湧いてきた。バスは私の育った家のそばを走り抜け、母校の小学校の横を通過した。講演会場となった赤レンガの旧北海道庁は、今は重要文化財だが、私の家に近く、子どものころは池で小魚を釣り、下駄履きで庁内の人をたずねるほど身近な建物だった。

今回の旅行が歴史ツアーだったことから、私も自分の父祖の足跡に思いをめぐらした。曾祖父らが、北海道開拓の意気に燃え、徳島を離れて札幌近郊で土地開墾をはじめたのは明治 15 年だった。屯田兵条例以前のことで、開墾は水害や冷害、イナゴの大発生などで困難をきわめたという。それでも、藍の栽培をはじめると、懸命の努力で着実に開拓を進めたことが記録にある。明治 19 年には、東京で新聞記者をしていた祖父も札幌に移って新聞事業に着手し、こうして父祖たちは北海道に腰を据えた。祖父の新聞社は発展し、今の北海道新聞に継承されている。戦後道新の社長となった私の父は、昭和 26 年に北海道ではじめての民間放送を創設した。今回の旅行で、歴史講演会の主催者に北海道新聞の名前があったことや、札幌から小樽に向かうバスの中で、手稲山頂に北海道放送がはじめてテレビ送信所を建設したとガイドが説明したことなどから、私は父祖たちの足跡を意識せざるをえなかった。もっとも、父は近代

的なマスコミの経営に世襲制や同族経営はふさわしくないと考え、私たちも父に共感したので、私たちの代には、北海道のマスコミ経営にかかわる者はいない。首都圏に暮らす私は、父祖の創設したマスコミ企業や札幌交響楽団が、北海道の社会と文化に貢献することをひそかに願ってきた。

ふりかえると、北海道は戦後のある時期までは目ざましい発展をとげた。昭和 43 年に開道百年を迎え、昭和 47 年に札幌の冬季オリンピックが開かれたころは、輝かしい未来を感じさせたものだ。近年、さまざまな産業が停滞し、大黒柱だった拓銀が破綻し、北海道の人々が深刻な不況に苦しんできたのは、心痛むことだった。しかし、北海道の豊かで美しい大地と、おおらかで誠実な人たちを見ると、北海道は必ずしっかりと立ち直ると私は思う。明治以来、風雪に耐えて発展をとげた北海道が、屈する筈がない。野幌の歴史博物館を、北海道の人々が「北海道開拓記念館」と名づけている気持ちが、私にはよくわかる。

道南を旅して—松前の桜と函館夜景と札幌の講演会

石川 直義

岩倉使節団の研究会の今年の歴史の旅は會員の松前孝廣氏（旧松前藩主家 2 3 世）の熱心な勧誘と著名な研究者北大名誉教授田中

彰氏の講演の目途が立ったので松前—函館—小樽—札幌の 4 日の旅行を企画した。少し日記風に報告しよう。

(第一日目) 連休明け5月7日朝仲間25名は函館に飛んだ。函館空港に着くとバスで松前町に直行した。松前孝廣氏が藩屋敷前でビデオカメラ片手に待ち構えておられた。この方に松前の世話役をお願いしたが、朝5時に前夜の雨が止んで大変嬉しかったと最初に言われた。早速藩屋敷で贅沢な昼食—18代藩主松前徳廣の婚礼のときに出された御馳走を再現したもの—をいただいた。あわびご飯、鯨、寄せ豆腐、けいらん、松前漬などである。午後快晴の下花見を満喫した。松前の桜は250種類一万本とその規模は日本一だろう。弘前と角館の桜を知る私達もシャッポを脱いだ。松前を代表する品種は南殿(なでん)であるが、光善寺の血脈桜(けちみやく)を親木として増やされてきた。この親木は推定樹齡280年といわれるが、町の広報によると次のような美しい伝説がある。この桜が八重の大木になった宝暦年間約250年前のこと、本堂修理のためこの桜を切ろうとした前夜、住職の枕元に一人の女性が現れ『明日死ぬので血脈を下さい』と頼んだ。(血脈とは死んだ人が仏になれるようにお坊さんが与える書付のこと) 住職はその女性を本堂に入れ、念仏を唱えて血脈を与えた。翌朝、住職が切り倒そうとする桜を見あげたとき、葉の間に白いものが動いたので近寄ってみると、それは前夜与えた血脈であった。前夜のことは全て桜の精のしたことだと悟り、直ちに伐採を中止し、盛大に供養を行い血脈桜の名がつけられ

たというのである。桜の種類多くは品種的には北陸地方に自生する桜に近いようで、北前船とともに運ばれてきた日本海文化の一つと言われている。桜の中で私は白く重い花をつける『雨宿』『蘭蘭』に魅かれたが、数では断然多いのは『南殿』である。

松前さんの郷土愛が町を動かし、宴会には就任したばかりの新町長はじめ観光協会の方にも出席していただいた。観光協会会長自作の松前民謡の披露あり、仲間から『昴』『天城越え』『硝子のジョニー』などを返し、宴会は盛りあがった。夕食後10人ぐらいで淡くライトアップした『南殿』の桜の下で夜桜を堪能した。宿に酒の用意をさせ手にするお猪口に桜の花びらを浮かべて呑むのは乙なものだった。

(第二日目) 翌8日朝隣町福島町の千代の山・千代の富士横綱記念館に立ち寄った。二人の横綱を生んだことを誇りにする町長さんの出迎えを受ける。館長は千代の富士の姉上がしているが、予想したより小柄なのに少し驚く。函館への途中トラピスト(男子)修道院と三木露風の記念碑を見学した。海岸線を走るとまもなく洞爺丸遭難の碑を過ぎる。1954年9月の15号台風で1761名の死者を出した(岩波・日本近代史年表による)日本最大の海難事故だ。ある仲間は当時NHK記者としており、事件当夜宿直をしていて現地取材した話をされた。私の記憶には一人の若い米国の牧師が人を救うため自分の持っていた浮

き袋を渡して自分は海に沈んだ話がある。(その牧師の名は Dean Leaper と言い、駆けつけた夫人は夫の遺体があがるのを待たずに急ぎ帰国して、エール大学を卒業して同大学の教職に就き四人の子供を育て上げた。今年9月に行われる遭難五十周年の慰霊祭に出席するために来日すると帰京後恵泉女学院の一色義子理事長から伺った。)

函館に着いて老舗五島軒でカレーライスを食べながら元町周辺を散策した。その中心の教会群にはハリストス正教会、カトリック元町教会、聖ヨハネ教会があった。私の関心は岩倉使節団に同行した女子留学生の一人山川捨松(後年陸軍卿大山巖と結婚し鹿鳴館の貴婦人と呼ばれた)が預けられたのが教会だとすれば、建設年とフランス国籍の関係からカトリック元町教会だろうと推定した。(しかし教会でなく市内に住むフランス貿易商の家の可能性もある)

トラピスチヌ(女子)修道院も訪ねたが、私は60年前戦後間もない小学生時代に来たことがある。修道院の周辺は一带が森で藪など摘んだ記憶がある。今は綺麗に整地されてしまって、すっかり趣きは変わっていた。聖堂内の見学はもちろん出来ないが、修道院の内部の秩序はおそらく不変で、今も70人の敬虔な修道女達が生活を続けている。一度入ると生涯外に出られないのに毎年1、2人が入門する、また最近最年長の修道女が94歳で亡くなったとガイドの説明を聞いた。それを耳

にして『魅力的な環境でも一生入るのは嫌ね』と仲間の女性が本音を語った。

榎本武揚、大鳥圭介、土方歳三など勝負を度外視して武士として意地を貫いた、戊辰戦争最後の戦場函館戦争の五稜郭は桜が散りかけていた。勝負を分けたのは旧幕府軍のブラッケー砲が射程距離1000米に対し政府軍のクルップ砲が3000米の差で、北海道自治共和国の夢は消えた。10人のフランスの軍人が幕府軍側で戦ったことを知った。開港に伴う国防のために作ったこの城はこの国内戦争だけに使ったことになる。

夕食では団員の自己紹介に当たったが、各自短い時間に内容のある話をした。食後バスで函館山に登り夜景を楽しんだ。広報誌に『海を渡る星 その姿は海に浮かぶ銀河 吸い込まれるような美しさに時が経つのも忘れる』と書いているが決して過言ではない。両方海に囲まれた函館市の夜景は神戸・長崎を上回る日本の夜景を代表する美しさだと思う。

(第三日目) 湯の川温泉で一泊して朝8時バスで大沼・洞爺湖経由札幌へ向かった。北海道富士・羊蹄山を右に左にしながら進み、昭和新山の麓、ダケカンバ林に残雪を置く中山峠で小休止した。午後3時に開拓記念館についた。高校時代の学友山田家正館長自ら玄関にお迎えいただき、早速北海道開拓の歴史を勉強させていただいた。展示資料がよく整備されており、学芸員も充実しており北海道を代表する歴史博物館であることを知った。北

海道開拓の村には行く時間なく、この点はバスによる移動でなくJR特急を使っていけばもっと時間が出来たと旅行幹事として反省した。夕方小樽に着きまだ明るかったので三々五々運河沿いに散歩をした。古い建物にしっかりした建物が多く、運河は相当手を入れられて魅力的な散歩道をつくり、はっぴ姿の人力車の若者を用意して小樽市が観光に努力しているのが分かった。

(第四日目) 最終日の朝は小樽市鯉御殿を見学した。これは泊村の網元田中福松が明治期に建設した現存する最大の鯉御殿を移設したもので往年の鯉景気を想像させた。

午後赤レンガ庁舎で講演会を予定していたので早めに札幌に向かった。講演会は米欧回覧の会・開拓記念館・北海道新聞社主催で企画された。先ず映像『岩倉使節団の世界一周の旅』第一巻米国編を上映して講演会に移った。講師と演題は泉三郎代表に『岩倉使節団とフロンティア・スピリット』また北海道大学名誉教授田中彰教授に『岩倉使節団の今日的意義』と題して自由に話していただいた。田中教授の論旨は同氏の持論である小国論であった。すなわち岩倉使節団は欧米12カ国回覧して米英に多くを学ぶが、結局ドイツのビスマルクの影響を最も強く受けて富国強兵の大国主義の道を進んでしまった。しかし使節団はデンマーク・ベルギー・オランダ・スイスなど小国が勤勉を武器に独立を守り独自の文明を作っている点も良く観察しており、その小

国主義こそが明治時代の自由民権運動、大正デモクラシー、戦後の民主主義に続いて平成の日本のあり方を決めると。現在イラク自衛隊派遣を契機に、大国主義がまた頭を持ち上げていることへの警告と理解した。しかし久米邦武編の『米欧回覧実記』の見方は議論の分かれるとろで、岩倉使節団は広い視野で大国も小国も良く観察して、遅れは40年と理解して日本は立憲君主制を確立して近代化を急ぎ、『中』の国を目指したとするのが米欧回覧の会の大方の見方である。

三時間の映像と講演会の後、関係者で懇親会を終えて千歳空港に向かった。バスが札幌を離れる時、丁度雨となった。我々が滞在した北海道の4日間、快晴に恵まれ旅行をフルにエンジョイできたのは、松前桜の美しさを紹介するために晴天を願った松前氏の祈りが天に通じたのだし、函館以降の晴天は残る仲間の日頃の心掛けが良かったからだろうか。いずれにせよ25名の仲間が好天のもと楽しい歴史の旅を無事終えることが出来たのは僥倖だった。



撮影 古後正代

松前、函館、札幌、三つの発見

泉 三郎

1 北の桃源郷・小京都

「松前」という名前はこれまで「こんぶ」や「松前漬」を連想するばかりで、江戸時代を通じてそこに松前藩がありその居城があったことにはなにか不思議なものを感じていました。地図で見る限り地形からして港という感じはなく、しかも立地は僻隅にありという感じです。明治以降の函館や札幌の発展ぶりから見ても、「何故、松前なのか」という疑問があったからです。いうなれば、「松前」は私のイメージの中ではある種の「幻の城下町」だったとあっていいでしょう。松前が何故藩の居城の地に選ばれたかについては、二つのことを聞いていました。一には、北海道最南端にあり本土から最も近いところに位置すること、二には天然の砦ともいえるべき山々に囲まれた海辺の地で、北のアイヌや異民族から身を守るのに有利だったからだということです。

しかし、現地に行ってみても、そこには港に適した湾も内海もなく、ただ海岸に面しているというだけという印象でした。ただ、古い絵図をみて、江戸初期まで遡って自分をそこに置いてみると、なるほどと思うことができました。当時の生活はまるで原始的なもので小さな船ならば川尻のたもとでも十分発着

が可能であったし、よくみれば河口付近にくつかの岩礁があり、それが多少とも防波堤の役目を果たしていたようにみえたからです。

それに、戦国時代、若狭にあった武田氏の一族がこの地に至り、アイヌのコシャミン（シャイアンと語感が似ているので西部劇を連想してしまう）と戦って鎮定したわけですが、そのころの戦からすれば小さいながら三方山に囲まれた地形は確かに守るのに好都合だったのでありましょう。

それにもう一つ重要な発見は、風土的に素敵な土地だということです。今回、松前を初めて訪れての第一印象は、「桃源郷」だという感じでした。それは函館からの途次、松前藩領であった知内や福島を過ぎる頃からすでにそんな感触がありました。季節がよかったこともありましょう、その日がまた美しい快晴であったこともありましょう、北の国はまさに春爛漫、一方に輝くような海原がひろがり、一方には浅緑の穏やかな山容があって、その間にゆるやかに川が流れ、美しい樹林を背景になだらかな畑が展開していました。若緑は清々しく、地には各種の花が咲き乱れていました。それはまるで瀬戸内の隠れ郷のようでもあり、さらにいえば地中海に接するプロヴァンスやトスカナの小さな里もかくや

と想せるものがありました。

ここは北海道でありながら最南にあるため気候が温順であり、冬の厳しさは別として少なくとも五月から半年近く、梅雨もなければ猛暑もなく快適な気候なのです。それに米はとれなくても漁業や狩猟資源はふんだんにあり、その捕獲と交易をもってすれば経済的にも恵まれています。それらのことを思えばこの地を拠点とし定住した理由もわかるような気がします。初期の冒険家たちも今回の旅のような季節に訪れて、この「桃源郷」のような土地柄に魅せられたのかも知れません。

しかも日本海沿岸航路は当時のハイウェイのようなもので、山坂の多い内陸ルートに行くよりはるかに便利だったのでしょう。つまりこのルートで往来すれば意外に京都は近く、情報も文化も早く伝わったに違いありません。松前藩が「小京都」といわれる所以もそこにあり、多くの藩主が京の公家から姫をむかえていたということもすんなり理解できたのです。

2 豪商高田屋嘉平とコモドール・ペリー

二つ目の疑問は函館です。ここは地形からして港にうってつけの土地でありながら、何故近世まで開発されなかったかという疑問です。それは、やはり時代背景というものでしょうか。江戸が都市として隆盛になり、それに伴い交易が盛んになり船の大型化も進んで、太平洋ルートが脚光を浴びてきます。そして

登場するのが一代の傑物、高田屋嘉平なのです。嘉平については豪商、北海の開拓者、ロシアとの外交交渉、とくにゴロウニン事件における目覚ましい実績がとくに有名ですが、私はその豪商ぶりの実態について詳しくは知りませんでした。しかし、現地に旅してその事業家としての資料をあちこちで見、そのスケールの大きさには感嘆させられました。函館には大きな銅像が建ち、いくつもの資料館がありますが、函館における嘉平の存在の大きさを改めて知る思いでした。

嘉平は淡路島の出身で少年の頃から海運業に携わり、やがてその才覚と度胸と人間的魅力で大をなしていくのですが、その主舞台はまさに函館であり北海道でありました。その業績は素晴らしく、海運業から始まって造船、漁業、土地開発、金融など多方面にわたり活躍しました。嘉平は晩年には淡路島に隠棲しますが、高田屋の事業は巨大化し資産は膨大なものになります。幕府はその力を怖れてか、密貿易を口実に断固たる「関所」に処し、大方の財産を没収してしまうのです。その際の財産目録が資料館にありましたので、参考までに転記します（原典；松浦武四郎「蝦夷日誌」）。

有金 千八百二十七万八千五百両

土蔵 三〇七カ所

大船 千石船 四百五十艘

有米 三十九億と十一万石、

田畑海山共 九万石、他に鳴三カ所、

家内惣人数 千六百四十録人

これは有力大名以上の財力とっていいでしょう、現代なら大商社、大コンツェルンという感じです、そして大きくなりすぎて時の権力者につぶされたということでしょうか。

さて、その函館が国際的な港に変身して一大飛躍を遂げるきっかけはペリー来航です。ペリーは1854年、ポーハタン号で函館にやってきます、そして「世界でも有数の美しい港だ」と感嘆しており、二週間もここに滞在し、土地の人々とさかんに交流をはかり、1600両もの金も落としたといえます。最初は怖れていた函館の人もすっかり気をよくし親しくなって大いに歓迎したそうです。

そして開港と同時に続々と領事館はじめ教会や修道院や各種の施設が造られました。それがいま「坂と海のあるエキゾチックな街」として函館の観光の目玉になっています。因みに1864年に函館に寄港した外国船の数は、英国が46隻、米国が17隻、プロシヤ7隻、フランス2隻で、主要取引品は昆布、他には干アワビ、するめ、生糸でありました。

そしてこの函館の国際化は、わが岩倉使節団とも関連してくるのです。語学をよくした随行書記官の塩田三郎や川路寛堂は父親の任地の関係でここで英語やフランス語を習いましたし、新島襄はこの地から密航を企てました。

こうして現地を旅し、その歴史的推移を辿れば、私の疑問も氷解するというものです。

3 札幌のモデルは京・長安

三つ目は札幌です。札幌はこれまでも何回か訪ねており、そのハイカラな街並み、とくに大通公園に代表される西洋風の都市造りは、米国を視察してきた黒田清隆や招聘したケブロンたちの構想によるものとばかり思いこんでいました。ところが市の資料館で絵図などをみて、それが誤りであることを発見しました。

札幌には、当然のことながら、黒田清隆以前の歴史があり、初期開拓時における先人の業績があつてその上に近代があるということに気づいたのです。そこで想起せねばならない第一の人物は近藤重蔵です。近藤は蝦夷探検の先駆者であり、札幌の原野を見て此处こそ北海道の首都になるべき土地だと看破しています。第二の人物は松浦武四郎です。松浦は大旅行家で歴大な記録を残した人物ですが、「北海道」の名付け親でもあり開拓使の最初の判官（行政官）に任命され行政区分を造った人でもあります。

さて、では実際に札幌の都市計画をすすめた人物は誰かといえば、佐賀の島義勇であり、土佐の岩村通俊なのです。明治政府は政権が安定するといよいよ本格的に開拓をすすめるのですが、その実務を担当したのが島であり岩村だったのです。彼らは、当時のサムライの漢学的教養からして当然だったのかも知れませんが、京・長安を手本にプランを造り、碁盤の目の道路を造り、大通りの幅も決

め、地名に円山、伏見、鴨川などつけたのも、そのあたりの事情によるものと思われま

す。最後におまけのような発見を一つ記します。札幌のシンボリック存在、時計台の建物は誰もご存じのようですが、さてその時計の真下にある扁額「演武場」にお気づきだったでしょうか。この建物はクラーク博士の後を継いだ二代目の教頭ホイラー博士が、明治十一年に建てたもので、その二階の講堂兼体育館にも野太い字で「演武場」の額がかかっています。そしてその片隅に従一位具視とあり、実は岩倉が揮毫していたのです。という次第で、最後に札幌の地で岩倉具視と出会えたのはやはり何かのご縁というべきでしょうか。

ともあれ、現代は活字、映像の時代で、そ

れが自在にふんだんに利用でき、居ながらにして情報を手にすることができる有り難い時代になりました。が、さて実像を把握しようとすればやはり現地を「回覧」して親しくその天・地・人に接して始めて納得がいくものであることをあらためて感じた旅でした。

それにしても旅するたびに「知らないことだらけだ」と思います。そして「米欧亜回覧」も結構だが、お膝元の「日本列島回覧」もしっかりやらねばならないとの思いがつのります。旅は若さの泉であり、好奇心を刺激し、感性を甦らせてくれます。これからも良き仲間と大いに旅をし、お互い、若さを保ち、松前の桜のように、それぞれの花を精一杯咲かせましょう。ボン ポワイヤージュ！



南殿の桜

撮影 松本伸子

松前の旅を終えて

岩田 美智子

風薫り、緑鮮やかな五月初旬、北海道松前での「米欧回覧」の旅が始まりました。

「米欧回覧」については未知の分野でもあったので、事前に文献を読み臨みました。もともと歴史に関する分野は好きなので、これからの学習と趣味の動機付けになったと喜んでいます。

それにつけても松前城の桜は見事でした。

「ソメイヨシノ」を見慣れた目には、さまざまな桜に目を見張るばかり。なかでも白い花びらの「雨宿」、濃い桜色の「血脈桜」には圧倒されました。花の真っ盛りでもあり、美しさは際立っていたように思います。そして、水仙と桜が同時期に咲き誇っているというのにも、不思議な感覚を持ちましたが、花のパワーを存分に浴びた至福のひ

と時でした。

また旅館では、毎夜二時間ほど同室の松本さんに手ほどきを受けて、ライトアップされた夜桜を絵手紙にしたためました。時の過ぎるのも忘れ、楽しいひと時を過ごしました。絵手紙を受け取った方の感想は聞いていませんが、松前の桜の美しさは伝わったと思います。

日々仕事に忙殺される身にとって、つかの間の休日ではありましたが、松前城のご当主や「米欧回覧」の旅に参加された多くの方々の話を伺えたのは、大変貴重な嬉しい出来事でした。

三日間、本当にありがとうございました。またどこかでお会いできますように。

北海道 松前 函館旅行

大久保 利宏

1. 松前の桜見物

一昨年(平成14年(2002年))12月新宿の京王プラザホテルにおいて日本最北の旧松前藩主家第23代当主松前孝廣氏の藩主

宗家襲名披露パーティーが催された。青木周蔵の建築した那須別邸のご縁で私にも招待状を頂いたので当会の代表泉三郎氏と共々出席させていただいた。その折、日本一の規模

を誇る松前城下町における250種一万本の桜の里のお話を伺い是非一度桜の季節に松前を訪問したいと希望に胸を膨らませた。

その後、米欧巡回覧の会から旅行のご案内を頂き、ゴールデンウィーク明けの5月7日早朝、函館空港に到着。バスに乗り継いで北島三郎の演歌の故郷知内を経由して、昼頃松前城のある松前町に到着した。

松前城は安政元年(1854年)に完成したが、現存するのは本丸御門のみ、天守閣は再建だが趣はある。北前船が往来した幕末の栄華を再現した14棟の建物のある藩屋敷で往時を偲び『藩主料理』で昼食。

当日は前夜来の雨も上がって快晴となり松前町を代表する早咲きのサクラ『南殿』、中咲きの『雨宿』『糸括』、松前生まれの『蘭蘭』も満開であったが、数ある桜の中、雄大な樹形と見事な枝振りを見せ、ふっくらとして丸形、梢々波状の皺があり、ずっしりと白く重い花をつけ、しだれ咲く『雨宿』は、特に印象的であった。推定樹齢280年と由緒ある光善寺の『血脈桜』の雄大な素晴らしさは、想像を遥かに超えていた。龍雲院の蝦夷霞桜も風情があった。戊辰戦争の戦火を免れ平成5年に国の重要文化財に指定された法源寺の山門はさすがに趣きがある。

松前家の菩提寺法幢寺の奥には総数55基の墓碑が並んでいたが、その中には歴代藩公墓所の織部型灯籠、六世盛廣侯の室椿姫の墓等々蝦夷地キリシタン史のかくれた証し

を見る事が出来た。

松前町観光協会の歓迎会は、町役場の企画課長岡本順一氏の名司会ではじまった。前田一男新町長が『歓迎のご挨拶』で大学の卒業論文のテーマは『岩倉使節団に大久保でなく西郷が参加して居たなら日本はどの様に変わっただろうか?』であったとの話しには全員が一瞬虚をつかれた一幕もあった。

大宴会の余興のカラオケ大会は大いに盛り上がった。松前町観光協会 会長 疋田清美氏の民謡は格別としても、前田町長の『冬のリヴィエラ』も絶品であった。一方 松前町組に対抗した 当会 泉代表の『昴』と佐藤ギン子さんの『天城越え』は一步も引けはとらない 堂々たるものであった。

宴会終了後 少し冷え込んできたが、宿で酒の用意をしてくれたので、淡くライトアップされた夜桜見物にも出掛け、とにもかくにも松前の花見を十二分に満喫して矢野旅館に戻り、冷え切った身体を松前温泉の名湯で癒した。

2. 函館・五稜郭観光

翌朝、隣町の松前郡福島町の横綱記念館(千代の山、千代の富士)を見学し、村田駿福島町長にもご挨拶をした。JRの木古内を過ぎ、上磯町では、戒律の鐘の音が響く静かなたたずまい、フレンチカトリックのトラピスト男子修道院にも立ち寄り、引き締まる様な雰囲気浸って、身も心も清めた。

函館では明治12年創業の老舗レストラ

ン『五島軒』で名物の魚介カレー（雰囲気は最高だったが味は普通）の昼食を済ませた。

函館は安政6年(1859年)の開港であるが、翌年の万延元年(1860年)に函館ロシア領事館附属聖堂として建立された日本最古のギリシャ(ロシア)正教会の函館ハリストス正教会(建築様式はロシア風ビザンチン様式)を見学。

(註)大正5年(1916年)に再建されたが平成8年(1996年)に国の重要文化財に指定された。

函館訪問は初めてであったが、坂の上から海がきれいに見られ美しい町であった。明治時代に函館出張開拓使庁が置かれ、行政の中心であった元町公園(花壇が美しかった)を散策し、旧函館会堂、カトリック元町教会、聖ヨハネ教会も簡単に見学した。

当時の最新式の軍艦『開陽丸』を擁した旧幕臣達が立て籠った最後の戊辰戦役函館戦争の『五稜郭』の桜は散りかけていたが、高さ60メートルの展望台のタワーから星

型のユニークな形状の洋風城郭跡や函館市街地を眺望する事が出来たので大変感動した。

3. 追録

(1) 今回の旅行では家内も参加予定であったが、直前に一寸体調を崩して不参加となったので、私も予定を短縮して一泊二日だけで函館から帰京いたす事になり大変失礼申し上げました。

(函館からの帰路の飛行機では藤原様と一緒にでしたが、道中では2人だけだったので話しが弾んで楽しく、種々お世話になり、ありがとうございました。)

(2) 宿泊では水沢様と同室にさせていただいたので、青木周蔵をはじめとして種々お話を伺う機会もありきわめて有意義な旅行となりました。松前の矢野旅館では宿舎で入室後、入浴もしなかった位に話しが尽きず、気が付いたら夕食の集合時間を過ぎており、宴席には少し遅刻しました。

北海道の旅「平成16年5月7日—10日」

小野 博正

松前はここにふれむ桜かな
遅れ来し北の京都の春に遭ふ
血脈(けちみやく)の桜まぼろしの京女

北国のもてなし百花整ひて
一行25名を迎えた松前は、あらゆる面でこれ以上のないもてなし振りであった。まず、

天気が快晴であった。『春風爛漫、桜花繚乱、
曆程ニ乾杯シ、花影ニ酔フ。道ハ北ノ古都松
前ニ至ル。花ハ紅ナリ 松前ノ春』と、まさに
この詩の如く道南の地・松前は町中が桜の
海。北国の春は、一気に百花が開花する花の
街でもあった。梅、桜、連翹、タンポポ、菫、
水仙、チューリップ、辛夷、白・紫木蓮等。
名物の桜に至っては、城下町に250種、1
万本が咲き誇っている。桜の名前もいろいろ。光
善寺の古木・血脈桜(けちみやく桜)、南殿(な
でん)、雨宿、糸括、関山(かんざん)等の八
重桜が豪華さを競い、しっとりとした染井吉
野もしっかりと健在。会員松前氏は地元のお
殿様の子孫で、氏の郷土愛と大変なホスピタ
リティが町を動かし、町長、観光協会を挙げ
ての歓待を受けた。昼は18代松前徳廣藩主
が京都から公家の嫁さんを迎えた婚礼のお祝
い膳メニューを再現した目にも鮮やかな朱の
椀とお膳の松前御膳。初日にして度肝を抜か
れる。午後は、福山城や、公園、始祖・武田
信弘から19代に及ぶ260年の松前藩藩主松
前家墓所や、いまに5つ残る寺のいくつかを
回った。京都の公家より代々、姫を迎えた藩
の戦略に、260年も改易もなく続いた秘密
を見た思いである。最後は、松前漬・龍野屋
の桜アイスクリーム・桜プリンの差し入れを
受けて感激。この城下町は江戸時代の蝦夷地
への玄関口たる関所であり、北前船などでの、
北陸や関西などを結ぶ交易を独占、その交易
品に関税をかけて藩財政を支え、「無高の藩」

は「沖ノ口奉行所」を設けて徴税した。
夕刻には、松前温泉の「温泉旅館矢野」に投
宿。夜は、再び新進気鋭37歳の町長、町議
会議長、観光協会会長の同席を得て宴会とな
る。観光協会長の作詞作曲の歌や、地元民謡・
道南口説節などの披露のあと、地元と我が団
員とのカラオケ合戦となり大いに盛り上がる。
温泉も薄い黄土色の硫酸塩泉で、旅の疲れを
忘れるのに充分。宴会後、有志で燗酒をぶら
下げて、福山城に夜桜見物に出掛ける。盃に
桜を浮かべて、桜下に酒を汲む。いまだき珍
しい1姫3太郎の子供を引き連れた若い初々
しい家族が花見しているのに遭う。水澤さん
が赤ん坊に頼りせんばかりにいとおしむ姿
も印象的であった。

5月8日はバスで松前を後にして、福島町に
ある「千代の山・千代の富士横綱記念館」に
立ち寄る。ひとつの町から二人の横綱が出た
偉大な町の町長の出迎えを受ける。館長は千
代の富士の実姉。それからトラピスト修道院
と三木露風の記念碑を見学して、函館へ。
函館の五島軒で昼食にカレーライスを頂く。
雪河亭・五島軒は建物自体も、収集品もちよ
っとした美術館であった。佐藤忠良や舟越保
武の彫刻、絵画や船山馨の遺墨、幕末の西洋
式船・箱館丸の模型、各種地図や絵図等の思
わぬめつけものに一同感激。海を見下ろす結
婚式場の如く豪華な食堂で供された海の幸カ
レーライスも中々美味だった。

午後は、青い海を眼下に眺めながら、高台

の函館元町地区を散策、亀井勝一郎生誕地を皮切りに、大三坂、チャチャ登りを経て、元町キリスト教会、東本願寺、函館ハリストス正教会などを回る。あと港地区の赤レンガ倉庫に立ち寄る。函館は路面電車が残り、長崎にも似た坂と港の瀟洒な町であった。武田斐三郎設計の五稜郭は桜が散りかけていた。旧幕軍のブラッケーリ砲（射程距離1000M.）に対し、政府軍のクルップ砲（3000M.）の差で、あえなく榎本武揚の北海道共和国の夢は潰えた。その夢の跡。今は庶民の憩いの場になっている。トラピスチヌ女子修道院の桜を愛でて、湯の川温泉・平成館新館に投宿。赤湯で有名な温泉である。

一面のたんぼを踏みて修道院

修道女見えぬ館の桜かな

つわものの夢も鷹の五稜郭

教会の眼下に港つばくらめ

夕食時は団員の自己紹介に当てる。夕食後、再びバスに乗って函館山にのぼり、日本一と言われる夜景を眺める。天気晴朗にして、言い値どおりの絶景であった。旅館にて、ミニスカートの美女の流し目に陥落して、5人の久米の仙人が遅くまでカラオケに酔った。

5月9日 函館から一路バスにて、札幌に向かう。途中、大沼、小沼、長万部をへて、洞爺湖の民芸御殿戸田観光にて、21世紀メニューの昼食を戴く。そして、支笏・洞爺湖国立公園一帯の風光明媚な景色のなか、北海道富士・羊蹄山を右に左にしながら進んで、昭和

新山の麓、ダケカンバ林に残雪をおく中山峠で小休止、せっせと群生して花芽のフキノトウをビニール袋一杯に集める団員もおられた。

羊蹄山は神の一睡夏がすみ

新緑の風さんざめくアンヌプリ（木村敏也—トイレにあった句—地元の俳人か?）

15時に北海道開拓村の隣り合わせの、北海道開拓記念館を訪れる。会員石川さんの学友でもある館長以下の出迎えを受けた。旧石器時代から、アイヌ文化、蝦夷地を経て、近代から現代にいたる歴史が通観できる堂々たる博物館であった。折しも、松浦武四郎の特別展も展示されていたが、閉館後も、所員や学芸員の熱心な説明を受けた。学芸員を27名抱え日本の博物館としては充実している。開拓記念館より、博物館の方が適切ではないかとの泉代表の指摘や、是非、研究者のための簡易宿泊所設備が欲しいとの水澤さんの提案も当会を代表してなされた。

バスで札幌から小樽へ向い、小樽ヒルトンに投宿。夕食前に、夫々小樽の運河地帯など散策。夕食時には、ホテルなので団体会食が利かず、4人ずつのテーブルに分かれ、夫々の話題に花を咲かせる。ホテルには温泉が無いのでちと物足りない感じ。

5月10日、午前中、小樽の鯨御殿を見物のあと、札幌でバスの車窓から札幌市街を眺めて札幌ファクトリに至り、昼食に、午後の講演で眠くなるのを心配しながらもジンギスカ

ン料理に舌鼓を打つ。午後1時から、重要文化財である「赤レンガ庁舎」(北海道庁旧本庁舎1888年創建)の由緒ある会議場で開催された歴史講演会は我々一行20名を含めて180余名を集めての会場に入りきれないほどの盛況であった。主催は、北海道開拓記念館、米欧回覧の会、北海道新聞社、後援はまなす財団、北海道開発技術センター。

まず当会作成ビデオ「映像が語る岩倉使節団・米国編」(35分)が上映され、一般聴講者に非常な分かりやすい導入ガイドとなった。今後の、当会の啓蒙普及にもこの映像は有効であると感じた。泉三郎代表が「岩倉使節団とフロンティア・スピリット」を講演され、札幌の開拓スピリットを称え、続いて岩波文庫米欧回覧実記の校注者である、北海道大学名誉教授田中彰氏の「岩倉使節団の今日的意義」の講演があった。近年、田中氏は色々な著作の中で、しきりに小国主義を唱えておられるが、久米邦武の米欧回覧実記の中には、大国主義と小国主義の記述が読み取れ、結局その後の明治の日本は富国強兵の大国主義の道を歩んでしまった。戦後の新憲法のもとで

最近までは小国主義の道を来たが、ここにきて、イラク自衛隊派遣を契機に、大国主義がまた頭を持ち上げていることへの警鐘が趣旨と感じた。岩倉ミッションが、田中先生の言われるとおりのスイス・ベルギー・オランダ・スウェーデン等の小国の記述にも併せて大国並みの紙数を費やしていることは確かだが、果たして小国主義が明治政府の選択肢のひとつとして真剣に取り上げられたかどうか、またその後、小国主義の水脈が伏流水の如く現在に繋がっているかどうかは、議論の分かれるところであろう。然し、実記を離れても、我が国の未来を考える意味で小国主義を再検討して見ることは意味深いものと思われる。

散会后、ホテル・ポールスター札幌にて、講演会の主催・後援者による懇親会に有志が出席した。席上、米欧回覧の会の北海道支部が欲しいとの提案や、水澤氏より実記の現代口語訳の発刊の目途がついたとの報告がなされた。終わると慌しく、バスで新千歳空港に駆けつけて20:50発のJALにて帰京、全員無事に愉しく実り多い旅を終えた。

松前の桜

梶 春治

今回の米欧回覧の会国内旅行は「松前の

桜道南の旅」で、旧松前藩の殿様、23世松

前孝廣氏が先乗りお膳立ての上、現地の案内までして下さったおかげで成立しました。松前町では町長さんはじめ町を挙げて殿の客人を歓迎して下さい、私達一行は大感激しました。私は特に藩屋敷での昼食を忘れる事が出来ません。18代藩主徳廣氏の婚礼の時に出されたお膳をいただき、150年前にタイムスリップ、幸せなひとときを過ごすことが出来ました。昼食後は快晴の空の下で桜花見、種類は250、約一万本の桜、これだけの桜を見るのはじめて、血脈桜という名もはじめてで、初物尽くしでした。お寺の境内や城址公園は満開で、5月の連休後という事もあり、人出も少なく、一番よい時に訪れる事ができました。

望 蜀

朝夕に 花待つ頃は 思い寝の 夢のうちにぞ
咲きはじめける 崇徳院

春が近づくと心に浮ぶ歌である。花狂いの私の花待つ心にピッタリだから。子供達が幼かった頃は、職場と家庭を往復するばかりで、桜の季節が来たのも去ったのも気付かぬ年が続いたが、彼等が成長して心にゆとりができるにつれ、花咲く春は心躍る季節となった。

北海道の歴史は明治以来の開拓からと思っていましたが、松前には400年以上の歴史があり、人口も江戸時代は三万人くらいあったと聞きました。又、東北やその他の地方で飢饉があっても松前は無縁だったと説明されました。北前船での商いが、人、物の交流にうまく機能していたのでした。又、曹洞宗の寺が多いので、永平寺の関係かなとも考えました。

続いて函館、小樽、札幌と3泊4日の楽しい旅行、今回も多くの方々と知合いになれば、仲良くしていただいた事を感謝いたします。今年還暦で子供返りのゼロ才、旅行等は喜んで参加する不良会員ですが今後ともよろしく願いいたします。

佐藤 ギン子

四十数年にわたる常勤の仕事から解放された今、桜が咲き始めると私は忙しい。花を尋ねて東京・横浜やその近郊は勿論、各地へ出かける。

これまでに函館五陵郭、弘前城、角館、高遠城趾、大阪造幣局、吉野山、平安神宮、仁和寺その他あちこちで華やかな桜を堪能したが、長いことあこがれていたのが松前の桜である。

ケニアに住んでいた頃、ある日、未知の方から実に美しい桜の写真集が送られてきて、松前の桜の存在を知り、死ぬまでには是非見たいものと思い、今年こそ、来年こそと思いつながら、実現せずにいたが、その願いが因らずも米欧回覧の会の旅でかなえられたのは、何という幸運だろう。

松前孝廣さん、石川直義さんはじめこの旅行のために御奔走下さった方々に心から御礼申し上げます。

松前の桜は期待にたがわぬ美しさであった。特に伝説にいろどられた光善寺の「血脈の桜」の圧倒的な存在感、「雨宿」のおうような白さと優雅な形などに感動した。このほかにも松前藩屋敷でいただいた、十八代徳廣藩主の婚礼の祝い膳、小さな美術館のような函館の五島軒や元町教会群、東本願寺、トラピスト修道院、トラピスチヌス女子修道院、北海道開拓記念館、赤レンガの北海道旧庁舎などの建物、洞爺湖の向うに雪をいただく羊蹄山など、今も心に残るものは数々あるが、一



つ、見た瞬間に思いがけない衝撃的な印象を受けた。屋敷の中の廻船問屋の2階の奥まった部屋に、異様な絵が12枚、射るような瞳と長い髪に不釣合に見える色鮮やかな衣装から突き出た、長く、筋ば

った毛深い腕と脚。全身にみなぎる不敵な力。彼等は一体何者か。その後松前城資料館で同じ絵を見て、8代藩主資廣の五男、蠣崎波響の描いた「夷酋列像」のコピーと知った。

この絵が、1789年の「クナシリ・メナシの戦い」と、その鎮王を契機に描かれたと知った後は、藩が用意した、彼等本来の衣服とは異なる華やかな蝦夷錦を着たアイヌの長老達の鋭い眼光に、おさえきれない怒り、悲しみ、誇りが宿っているような不思議な感動を覚えた。この絵が後に京都中で評判になり、天覧の榮譽に浴したのもむべなるかな。

12枚の原画は2通り作られたらしく、このうち、2枚は函館市立図書館に、11枚はフランスのブザンソン市立美術館に所蔵されているとのこと。ブザンソン美術館の原画を見た松前町の藤崎まちづくり観光課長は、異常な迫力を感じたという。

松前の桜の夢が実現した今、私の次なる夢はこの原画を尋ねる旅である。

ところで、今世界中で、indigenous な動植物が絶滅の危機に瀕していることへの危機感から、これらの動植物を救おうと、UNEP や多くの団体が活動している。しかし、人間については、人権、結婚や移動の自由などの問題もあり、グローバル化の進展の中で、絶滅の危機に瀕する人種・民族への取組みはむずかしい。純粋なアイヌの人口の減少は致し方ないことかもしれないが、実に残念なことである。

松前の桜

澤本 佳子

桜と言えば、そめい吉野、山里桜、大島桜ぐらいしか知らなかったのですが、八重桜のピンク色の南殿、白い雨宿。他にも多くの名前を持つ桜を見ることができて感激しました。

松前城を囲む広い庭園と周りのお寺など、南殿のピンク色が、明るい空と青い海を渡る風にゆれて、本当に見事でした。また、水仙、チューリップ、桜草、スマレなど春の草花も

一斉に開花している様子もきれいで、北海道だなあーとうれしくなりました。旅館の窓を開けると、松前城と南殿の桜が目の前に広がり、夜桜のライトに照らし出されたすてきな風景を思い出しています。今回、初めての松前という場所の旅行に参加でき、春の一日をみごとに桜と共に過ごせたことを本当にうれしく、感謝して居ります。



提供 松本伸子

血脈の桜の前で左から松本・松前・澤本・岩田のみなさん

北海道にて

永島 千代子

松前に 色隠すべき 雨宿
血脈を 南殿の花に 授けたり
夜桜の もとで会いたや パラダイス
花吹雪 母なる海を 荘厳す
北の春 旧友繋ぐ 北斗星
台風に 傾きし船 偲ぶ浜
山かげの 光うれしき 水芭蕉
待ちかねし 五稜郭にも 花の宴
ふきのとう 数え山越ゆ バス旅行
春なれば 意気に感ずる 開拓史
語る目に 父と雪とを 映す人



桜の五稜郭

撮影 橋本吉信

初めて行った北海道

納家 弘美

2004年5月の連休明けの歴史の旅は道南の松前城と桜の観光に始まり私の目から鱗が何枚か チラチラと舞い下りて行きました。{雨宿り}でも止まらず、次々に訪れたところで、私の脳の中を大改造する羽目に何度も鱗は何枚も散りました。

学校で習った北海道開拓は明治になってからと聞き及んでいたの、松前城主の二十三代目の方からのご案内に驚き江戸幕府は、どの程度の範囲まで統治していたのかと不思議に思い又、知識の無さに反省しきりでした。

総勢26名の中で北海道は初めての人は残念ながら私が一人でありました。素晴らしい北海道をもっと知りたく皆様とは札幌で失礼にもお別れして他のツアーに便乗して道東、道央を観光して美しい芽吹きを堪能してきました。

広大な十勝平野、天然資源の豊富な北海道は冬場を避けて本土から農耕に通って飢饉で苦しんだ人々を助ける政策が取られなかったのは何故だろうかと考えさせられました。

江戸時代以前にも北海道はあった筈なのに、どうして人々は開拓することが出来なかったのでしょうか、訪れた5月初旬でも素晴らしい気候に恵まれて農作物の生育に問題があるとは思われなく疑問がわきました。

何でも知りたがりの私は、行く先々の観光地物産店を案内されるまま珍しい産物を漁ってお金が足りなくなりホテルでデビットカード扱いをしてくれた所と、してくれない所があり、信用のない女の一人旅の味わいを温泉でスッカリ洗い流して大満足で帰宅しました。

楽しい旅をお世話くださいました皆様本当に有難うございました。

デンマーク国の話

西井 正臣

松前のお殿様の郷土愛と石川幹事の綿密な計画、参加者の心がけに報いた天候のおかげで、最高の旅行ができた事を、まず感謝し

たい。松前城でライトアップされた桜の花びらを杯に受けて酌み交わした酒は、今回の旅のハイライトであった。「ああ玉杯に花うけ

て」を口ずさみながら城門を出た途端にライトが消えて驚いたのも、忘れられない。

札幌の赤レンガ庁舎での講演会も良かった。しかし、その後の懇親会で北海道の行政の方からこの豊かな北の大きな島の現状について、悲観的な言葉を聞いて意外な感じがした。その席で内村鑑三の「デンマーク国の話」を持ち出したが、相手の方はご存知ではなかった。私自身も50年前に読んだだけなので、うろ覚えであったが、人口的には北海道と同じデンマークが発展をとげた話であったことだけは記憶していたので、北海道も頑張っただけかと思って話題にした。

帰ってきた翌日に古い岩波文庫を探し出して記憶を確かめた。昭和22年に出た本だが、元は明治44年(1911)の講演である。デンマークは面積的には北海道の半分、人口は北海道と同じ500万人台の小国である。1864年プロシア、オーストリアに敗れて、豊かなホルスタインとシュレズウィヒの2州を失って現在の小国になってしまったのであるが、信念の人ダルガス親子の植林事業を軸に再興した経緯が、この内村講演の趣旨である。内村は札幌農学校の第2期生だったから、この話をした時も北海道のことが頭にあっただろう。岩倉使節団も1873年に首都コペンハーゲンを訪れているが、久米によれば、国民は「一般ミナ質朴ニテ、生業ニ励ミ、奢麗ノ風ニ淫セサルハ、欧州第一ナルベシ」と評価している。ちょうど敗戦から立ち直る時

期の頑張りを見たのであろう。

デンマークは、小国ではあるがよく独立を守り、その生活水準は世界でも最高レベルにある。環境保全と国民福祉の面では最先端にいるようである。ノルゴ博士とクリステンセン女史の「エネルギーと私たちの社会」によると、デンマークはGNP 信仰を卒業して生活の質を高める成熟社会に向かっている。

1992年に風車法を定め、2030年にはエネルギーの35%を風力発電で賄おうとしている。この分野では、世界最高の技術と経験を持っていると言われている。岩倉達が訪れた頃は、デンマークは世界の電信事業のリーダーであった。

北海道も、本土の路線の枠にとらわれず、独自の発展方向を目指しては如何かと提案したい。明治の開拓使以降、あまりにも本土志向が強いのではないか。松前藩の頃の独自の経済と文化を誇りにして、榎本武揚が目指した独立国の気概を持てば、東洋のデンマークが出来るかもしれない。

いや、日本全体が、アメリカに追随する物質至上主義からはなれて、満足感の高い生活の充実を目指すべき時期に来ているように思う。あの夜桜の美しさを大切にしたい。

良き仲間をめぐまれた楽しい旅であった。おかげでデンマークのことを勉強することもできた。松前さん、石川さん、お世話をいただいた皆様、本当に有り難うございました。

道南にて詠める

西脇 美都絵

輝ける 波まぶしかり 故郷に
続きし海を 母いかにやと

悔ゆること なきまでまみえん 血脈の
いのちの鼓動 われに届きし

寄りそいて 香りを愛でる ひとときの
雨宿り誘う 白き花陰

風雪に 堪えてめぐりて 逢いし花
群青の空を 染めるやさしさ

深む夜の 古き桜樹 仰ぎ寝て
友 西行句 ローズさむなり

花かがり ひとひら散らす 盃の
うま酒に酔う うたかたの宴

五稜郭 熾烈の跡は 哀しくも
花に包まれ 香る 安けさ

ひっそりと 造船所跡に 碑の在りて
嘉平の天命 語りつくすごと

煌めきの 数ほどありし ああ生活
津軽を越えて 踏みしは誰そ

この春の 花散りしとき 友遊きぬ
舞うひとひらに 空ろいのかげ

さくら花 吹雪となりて 花筏
松前の海 蔽いつくすや

残雪の 中より萌えし 落のとう
中山峠の 春を越えゆく

歴史と文化を象徴する松前の桜

橋本 吉信

1. 松前の桜に思う

「しきしまのやまと心を人とはば

朝日ににほふ山さくらはな

日本人の本来持つ、やさしく、やわらいだ心情を、このように本居宣長は桜に託して詠みました。

北の小京都と称された松前城下には、遠く京都や近江の郷里からもたらされた桜と全国から集められた桜が品種改良されて生まれ育ち、250種、1万本以上の桜が、4月から5月に「早咲き、中咲き、遅咲き」へと、あでやかな姿で咲き誇るといいます。

今年も1週間も早い開花予報を気にしながら、桜前線の北上を追いました。

果たして、天気恵まれ「天下一品の松前の桜」を期待通り見られるだろうか。

松前さんからは、熱のこもった現地準備の様子が伝わってきました。

私は妻とともに参加し、5年ぶりの北海道をゆっくりと楽しく満喫させていただき、多くの発見と刺激をいただくことができました。皆様に、心から感謝を申し上げます。

「松前の桜」は、その歴史と文化を象徴していました。

城下を巡り、奈良の都に咲いた八重桜から現代に至るまで、その時代を代表する優雅な

桜花爛漫に浸り、「桜の美しさ」が、初めて身にしみました。

そして、かつて北の辺境を支配し、交易で榮え、世界情勢と幕末の激動に翻弄された数奇な「北国の雄」、260年余の歴史への深い思いに誘われました。

堂々たる古木が茂る「松前藩主松前家の墓所」を訪れ、始祖以来の歴代の藩主などが静かに眠る多くの墓碑、キリシタン信仰との関係もある墓碑に刻まれた名前に人生を想い、松前の波乱に満ちた歴史を身近かに感じました。

爽やかに晴れたこの「松前の春」に応えるように咲き誇る独特の八重桜たち。

特に、光善寺境内の中心にどっしりと根を張り、頭上に大きく枝を伸ばす樹齢280年余の「血脈桜」(けちみやく桜)の存在感と生命力に感動し、いつまでも離れがたいものを感じました。さすがに松前の桜を代表する品種「南殿」の親木であり、伝説の銘木でありました。小生には、今回の旅の最も印象的で、忘れ難い思い出となりました。

満開の頂点を迎えたこの銘木に、しかも晴天に恵まれて、初めて出会えたことに、松前さんも感激しておられました。

城の北東、堀の水に映えて真っ白に咲いてい

た「雨宿」も、忘れ難いものがあります。

角館、弘前、奈良、京都など以上に、豊かで華やかな「桜の松前」を、こんなにも感動して心に刻むことができたのは、何故だろうか。

北前船(千石船)による交易、ニシン・昆布漁によって繁栄し、北辺を支配した藩の町。アイヌやロシアとの抗争。世界情勢の変化と幕末の激動。函館戦争。1871年の廃藩置県による藩史の終焉。そして平和な今日へ。

接木で桜の増殖に貢献した鎌倉謙助氏、全国からの桜の品種改良によって現在の松前独自の桜の基礎を築いた浅利政俊氏、そして町民挙げての「花守」としての努力が、全国に知られる「さくらの里・松前」を守り育てている。……

「百聞は一見に如かず」……旅をしていつも実感するところです。

机上の勉強で学んできた江戸、幕末、維新の北海道や松前の歴史、観光ガイド、パンフレットの内容は、親しく実感を持って理解できるので、詳細情報は一層有益な資料になっています。

朝、妻と海岸に出てみた。朝日がまぶしい雄大な日本海が広がっていた。

今度は、バスで走り続けた広大な磯浜と漁港にも足を運んで、昆布、貝、魚の水揚げに出会ってみたいと思う。

天守閣の「松前城資料館」には、松前藩の家老として活躍し、「松前応挙」と呼ばれた画

人・蠣崎波郷(かきざき・はきょう、1764—1826)が、アイヌ民族の長老を洗練された筆致で写実的に描いた代表作「夷酋列像」など、多数が展示されていました。妻はその特異な画風と生涯に興味を持ったようです。

松前さんが「蠣崎波郷の生涯」という大著を貸してくださり、その作品の歴史的背景と人物交流の勉強になり、感謝しております。

2. 北海道を巡って

冒頭の桜花に託した本居宣長の歌を、新渡戸稲造は英文著書 BUSHIDO—the Soul of Japan (武士道—日本人の魂)の表紙に記しました。朝日のように、日々新しい心で生き、爽やかに、忍耐強く清らかな「やまごころ」を桜花に託し、「武士道」の象徴としているのだと思います。

私にとって北海道は、札幌農学校(北大の前身)でクラーク博士の強い影響の下に学んだ、私淑する新渡戸稲造の思想と人格に触れるフロンティアです。

歴史講演会に重点を置いた札幌では、特別に観光はしなかったが、丁度 11 時に修復成った「札幌時計台」前を通り、初めて聴くチャイムをうまく録音に捉えることができました。

函館山の夜景は美しかった。夕食後の 9 時ごろであったが、登山道はラッシュせず、バスは順調に頂上に着いた。すっきりと晴れた夜空の下には、両側を海に挟まれた函館の町がダイヤモンドを散りばめたように、どこまで

も光の世界となって伸びていた。広い展望台は見とれる人々で溢れそうであった。天気にも恵まれ、念願がかなって幸運でした。

120年余の歴史のある五島軒で昼食後、五月晴れの函館を散策した。函館山の麓の高台には、威容を誇る東本願寺別院、カトリック元町教会、ハリストス正教会復活聖堂、旧北海道庁函館支庁舎、函館開発の四天王像、ペリー像が散在し、坂道の先に青々とした函館港につながる風景は楽しく、ソフトクリームを食べながら何度も歩きたい「港の見える丘」で、心地良い石畳の散歩道でした。

北海道開拓記念館は、赤レンガの近代的なデザインで素晴らしい。アプローチから見上げるように高い正面、ゆったりした中央ホールの空間とリクライニング・シート、壁面のデザイン、照明など。そして充実した展示品に、あらためて北海道で開拓に尽くした人々に感謝した。過去、現在を見つめ、未来を展望して研究しサービスする山田館長、大勢の

スタッフの成果を祈りました。

「旅は何処へ行くかよりも、どういう人と行くか」を、大切に考えたい。

その意味で、今度の「松前の桜、道南の旅」は、天地人に恵まれた大変価値ある「歴史ツアー」であったと思います。いつも元気一杯、臨機応変なガイドさんと安全運転のドライバーさんに感謝します。

お世話くださった皆様、有難うございました。



トラピスト修道院前にて 筆者夫妻

松前の桜に感謝して

8年前、「無理若丸」と言われ得意になって自分の体を酷使した酬いでしょうか、「憩室炎」が悪化して半蔵門病院に三ヶ月余り入院する羽目となりました。お医者様のお陰で

やっと外出する体力が戻り、こっそりと病院を抜け出して千鳥ヶ淵を散策することが出来たある夕暮れ、未だ蕾の桜の花が日増しに膨らんで行くのを眺めていると、人間が自然の

藤原 宣夫

力で“生かされている”と言う深い感動と喜びを感じて自然に涙がこぼれました。

時が経ってこの度、松前を訪れる機会を得、光善寺の血脈桜（けちみやく）の伝説を住職から教えて頂き、美しい見事な満開の桜を見つめていると感動した8年前のあの千鳥ヶ淵の桜を思い出し、再び、“生かされている”と言う幸せな思いに浸る事ができました。

あでやかな濃いピンク色の不思議な花びらが浄土へと続いているのではとも思われ、私達の死後の世界への書付としての血脈が納得の行く話として理解する事も出来たのです。

私達日本人は桜を昔からこよなく愛しています。その為か、多くのボランティアが平和な世界への願いをこめて、桜を植える活動を世界の各地で行っています。今年初めにはカトリック高松神学院の谷口神父が、86人の善男、善女とともに法王庁を訪れ、「バチカン庭園」に桜を植えてこられました。日本からの植樹は初めてとの事で近いうちにきっと

見事な桜が見られるでしょう。又、この八月にはベルリンの壁崩壊のきっかけとなったハンガリーの「ショプロン庭園」に姉妹都市の秋田・鹿角の人々が桜の植樹を訪れるとのことでした。

時あたかも「観光立国日本」を政府は掲げております。富士山や芸者さんと並んで桜の花は日本の観光には欠かす事の出来ない花の一つでしょう。桜はその美しさと短い命ゆえに、日本人の生死感や気風のよさそのままに美を愛でる国民の象徴とされています。松前もご多分にもれず、この美しい花をその長い歴史とともに今もって皆に愛されている事をこの度の旅行で教えていただきました。何時の日か再び今度は家族と共に、松前を桜の季節に訪れさせて頂きたいと考えています。

末筆になりましたが、藩主の松前様を始め、今回の旅行計画にご尽力くださった皆様様に厚くお礼申し上げたいと存じます。

松前の桜と歴史事始

「松前の桜を見に行きませんか」と誘いの声があった時、「松前？桜が有名だった？」私の記憶にある松前と言えば、北前船と松前漬のイメージしかなかった。しかし、250種

10,000本以上の桜の木々が時期を違えて咲き乱れるという桜の名所だと聞いて、私の心は北海道の松前の地に飛んでいった。

北海道には十数回訪れたことがあるが、そ

松本 伸子

の殆どは真冬のスキー旅行であった。夏に札幌を中心とした観光も数回はしている。何度も北海道へ行ったので「松前」の名前を知ってはいたが、地理的に函館の近くとしか認識していなかった。

函館市役所で松前氏と会い、松前町に案内していただいたが、静かなとても落ち着いた雰囲気町の町だった。宿の部屋からみた夕景に咲く桜の美しさ。しばし見入っていた。翌日、東京からの皆様と合流する前に、松前城周辺を回り、桜の花々を鑑賞した。ソメイヨシノの桜も見事であるが、八重咲きのなんともやさしい色合い、風情に心を奪われた。八重咲きの桜は今まであまり好まなかったが、「南殿」「雨宿」「糸括」「普賢象」「鬱金」等の花々を見ていると、自分の心がとても癒され、やさしくなれると感じた。

「米欧回覧の会」の皆様と、松前～函館までご一緒させていただきましたが、皆様の会話やお話をお聞きして、「その土地の歴史と向

かい合いながらの旅行もあるのだ」と思い、旅行の楽しみをまた一つ発見した。旅行は大好きで、いろいろなところに行っているが、「目的は何？」と問われても、「何もない、ただ観光地を回るだけ」としか答えようがなかった。歴史的に有名な建物、歴史上の人物の生誕地や活動した場所等見て回ったが、ただ“見ただけ”で終わっていた。これからの旅の楽しみとして、訪れる場所の歴史、人物、風土など色々な視点で観て、聞いて学び、家に帰ってから印象ある事項について学習を深めるといふ姿勢で臨みたい。そうすれば旅の思いもよりいっそう楽しいものになるだろう。歴史は学生時代から嫌いではなかったが、改めて、興味が湧いてきた。「旅と歴史」また新しい魅力に取り付かれそうだ。

とても楽しい松前の旅でした。松前様、米欧回覧の会の皆様、本当にありがとうございました。



福山城

撮影 松本伸子

道南旅行の副産物

三原 浩

松前さんと石川さんのお蔭で今年は最高のお花見を楽しませて頂きました。遅ればせの申込でご迷惑をお掛けいたしました。家内ともどもお世話になり、まことに有難うございました。今回の旅行のお蔭で、半世紀前の思い出につながるきっかけが得られましたので、個人的な話で恐縮ですが、この機会にご紹介させていただきます。

*

1952年8月、六甲山腹の神戸大学キャンパスで、日本国際学生協会（略称 ISA）の主催による国際学生会議が開かれた。ISA というのは全国主要大学の ESS の連合組織のようなもので、戦前から日米学生会議を主催していたが、その頃は在日留学生や進駐軍として兵役中の学生を外国代表として、毎年夏休みに開催していた。私は京都支部からの実行委員として参加したが、京大文学部に留学中で、下宿も近く、学食や外食券食堂で時々顔をあわせていた AI Craig も引っ張り込んで出席してもらった。この年のゲストスピーカーは、湯川秀樹博士や岩井産業の岩井社長であったが、三日間の会議を終わって最終日には、舞子の浜で海水浴を楽しんだ。その時の水泳パンツ姿の二人の写真が残っている。

その後、AI が日本の田舎を見たいというの

で、私の出身地の島根県浜田市へ案内し、中国山脈の中の農村を訪問、青年団の人に集まってもらい質疑応答したのを覚えている。文学部での彼の研究テーマが何であったのか、化学専攻の私にはあまり興味がなかったのか覚えていない。浜田では私の実家は狭かったので、母の友人の家で、K 医院の二階の広い座敷に私も一緒に泊めてもらった。浜田では高校生だった弟も一緒に泳ぎに行ったが、後年、二人は東大でぱったり会って、喫茶店に行ったそうだ。1953年春、私は稲畑産業に就職し、AI は1955年にハーヴァード大学のライシャワー教授の下で博士号を取り、その秋には今度は東大法学部に特別研究生として入学したようだ。

1978年秋、私は稲畑アメリカ開設のためニューヨークに赴任し、約三年間滞在したが、1979年8月、ボストンに日帰り出張の機会があり、AI に電話したところ、朝9時ごろ空港まで来てくれて、短時間ながら26年ぶりの再会を果たした。1981年1月には、AI がニューヨークの事務所を訪ねてくれて、近くの寿司屋で昼食を共にした。その間、ハーヴァード大学に初めて行った時、AI から詳しい大学の地図を貰い、お蔭でその後二、三回、日本からのお客さんを案内することが出来た。

今回の旅行の前、実記を読む会で、田中彰先生の近著「明治維新と西洋文明」のことを聞き、札幌での講演会もあるので、早速購入して読んでみた。すると、「あとがき」にアルバートMクレイグの名前が出てきた。ここで初めてAIと岩倉使節団とが私の中で結びついた。ニューヨークでの再会后、再び23年が経過しているので、田中先生を煩わしてAIの自宅住所と代表論文を教えてもらい、手紙を出したところ、「1999年にリタイアしたが、週に三回は水泳と大学の研究室に出掛けている、今度日本に行ったら電話する」という嬉しい返事がeメールで返ってきた。田中先生から聞き、インターネットでも調べた1961年が初版の“Chōshū in the Meiji Restoration”は、2000年版のペーパーバックが入手可能とわかり、数日前に丸善を通じて入手した。385

ページもあるので、簡単には読めそうもないが、黒船来航から維新までの長州藩の動きに焦点を当てた論文のようで、当然ながら、木戸孝允や伊藤博文はしばしば出てくるが、岩倉使節団は未だ出て来ない。考えてみると、これまで断片的な付き合いであったとは言え、AIの研究内容について全く知らなかったことは慙愧に堪えず、失礼をしたと思っている。遅まきながらこれから少しでも勉強して、今度彼と会う機会があれば、歴史の話も聞かせてもらいたいと思っている。



血脈の桜と三原夫妻 撮影 松前孝廣

血脈

松前の桜は実に見事なものだった。250種類の桜が一万本あるとか。その中で特に立派な「血脈の桜」と名付けられた桜があった。名前の由来は看板に記載されていたが、血脈について筆をとることにした。

*

一般的に「お血脈（おけちみやく）」は善

若盛 宗雄

光寺本尊阿彌陀如来の血縁関係者であるという印のついた証書のお札のことであり、これを持っておれば極楽浄土に行くことが出来るという信仰である。牛に牽かれて善光寺といわれる様に、善光寺は宗派を問わず、あらゆる人々の礼拝を受け入れるお寺であり、善男善女はお血脈をもらって^{あんじん}安心を得てい

様である。

善光寺は天台宗の大勧進と浄土宗の本願寺によって管理運営されているお寺である。この様な形態のお寺は他にはない。推古天皇時代に草堂を作り、三国伝来の阿弥陀如来像を本尊となし、642年に現在地に堂宇を造営したと言われ、中世以後、人々の信仰を集め、現在に至っている。

しかし、血脈を仏教辞典で調べると、一般的に言われる様な内容と少々異なるところがある。辞典によると、血脈は(1)師資相承とも言い、師から弟子に正法を相統する事。身体の血脈が相連なって絶える事のない例えで命名したこと。(2)密教及び禅宗において師から弟子に戒を授ける時、その保証として師が与える血脈図(相承を記した系図)を略して血脈という、とある。

仏教装具の中に頭陀袋がある。この袋の中には血脈、手判、印文が入っている。前述の様に、血脈は戒律及び念仏の系譜をしめしたものであり、これを受けたものは祖師と同じ信心と安心を有するばかりでなく、祖師と同体化していると言う意味を持っている。

浄土宗には五重相伝と言う血脈がある。

初重は善導大師の「往生記血脈次第」、二重は円光大師源空上人の「授手印血脈次第」があり、これには善知識の両手形朱印が押されている。三重は弁阿聖光上人の「領解血脈次第」であり、四重は然阿良忠上人の「決答血脈次第」、五重は釈迦牟尼如来大和尚の「論

註口授心伝血脈」である。

この中で最も重要なものは授手印で、これは手判として頭陀袋に入っている。この場合、手判と血脈は同意味をもっており、手判は浄土宗本尊阿弥陀如来の「お手判」とされている。従ってお手判は阿弥陀如来の証明書であり、極楽行きの通行手形である。前述の善光寺詣でのお血脈のご利益の由来であり、地獄行きをはばからぬ大悪人でも血脈を得れば極楽行きが保証されるということになっている。中世カトリックの免罪符と同等である。

話はとぶが、一昨年『回覧の会』で、ドイツ、イタリアの旅行をした。ローマのサンタ・マリア・イン・コスメデイン教会を訪れた時、「真実の口」があり、私が口に手を入れようとしたら、泉先生が「このメンバーの中で、若盛さんだけが手を噛まれる」と言われた。私も「そう思う。」と言いながら恐る恐る手を入れたが、手は無事に戻った。今まで仕事柄ウソは随分ついてきたから、本番では、私は当然手を噛まれ、地獄に落ちることだろう。もし異教にも共通のご利益のあるお血脈があれば、海外旅行の際、是非持参したいものである。



水沢さんと筆者

歴史を拾う旅として

水沢 周

私の今度の北海道の旅は前半と後半でまるで色合いがことなつた。前半の旅は、優雅そのものであったが、これはもっぱら福山城主松前孝廣侯ならびに幹事の方々のお陰による。松前の桜はまことに見事というほかなく、蒼い海と艶やかな桜の対照は夢幻のような美しさであつて、思わず一句詠んだ。

松前は濤に散りこむ花吹雪

しかし、グッド・オールド・デイズがそのまま凝つたような穏やかな町から、現代そのものの札幌までの旅については、皆さんがいろいろ多彩な筆を振るわれるであろうから、私は皆さんとお別れしたあとの、後半の旅のことを書こう。

あれから二日後、私は友人の案内で占冠村字双珠別というところに入った。地図で見ると富良野の南40キロほど、上川支庁の南端で、もう日高の方に近い。占冠は、陸別や音威子府などと共に北海道でももっとも寒さの厳しい土地として知られている。そこで友人の息子たちが森林労働者をしているのである。

彼らの家は、国道と、鶴川といういかにも北海道らしく自然堤防の中を淙々と流れる川に挟まれた牧草地の中の一軒家である。その牧草地の中の、なんでもない溝のようなところにも水芭蕉やエゾノリュウキンカなどが咲

き乱れている。

その夜はふた家族プラス客二人、合計七人のバーベキューとなつたが、目の前の国道でつい先日トレーラーにぶつかつて即死したというエゾシカの肉をステーキにした。友人の息子が拾つて来て解体したのである。皮は玄関に干してあつた。このエゾシカは雌で、ご懐妊中であつた。あわれを覚えた息子は、シカの頭と胎児を庭先の桜の下に埋葬した。すると、どこでそれを見届けていたのであろう、その夜中、10頭ほどのエゾシカがその墓の前に丸く集まり、頭を垂れて弔つて行ったそうである。そういう珍しくも美しい話を聞きながら食べたステーキは、ことのほか旨かつた。そして私は若いころ、札幌の植物園の展示室で、開拓使の物産としてかつて製造されていたという鹿肉と熊肉の缶詰のサンプルの古びたレッテルを見て、深く感動したことを思い出した。この土地は、そういう野生動物の肉が、そのまま産業として成立するかもしれないほどに豊かな風土だったのである。その歴史の名残のようなものをかすかに感じた。

草原に鹿を弔う薄曇かな

その翌日は雨の中を60キロほどジープで走り、標高850メートルほどの野花南という尾根筋に上がつて山菜を採つた。700メ

一トルを超えると雲海が下に広がる。尾根は白い大海の中の島となる。その島で、野性のシイタケ、タラノメ、アイヌネギ、アザミの芽、二輪草、エゾエンゴサク、エゾノリュウキンカなどを採り、清冽きわまりない溪流の水を汲んだ。深い霧の中にはどこまでも巨大なフキノトウの列が続いていて、まさしくそれはコロボックルの国に迷い込んだ風情であった。こんなにもフキノトウがあるのでは、北海道人が鼻もひっかけたがらないはずである。

夏霧に妖精たちの潜み进行

その夜は山菜のテンブラ・パーティ。タラノメ、アザミ、シイタケ、アイヌネギ、そして北海道人にはないしょでこっそり摘んで来た、北海道にしてはまあ小ぶりとも見えるフキノトウ（それでも信州のものなどに比べると、四、五倍はある）などなど。このフキノトウのテンブラと、急いで作ったキャラバキと蕨の葉の煮物が意外に好評で、「初めて食って見たが、これはいけるさねえ」と…。北海道の野性の中に、内地のいささかせこい料理文化の風がちらりと吹いたようである。ほかにはエゾエンゴサクとエゾノリュウキンカを、空色と黄金色の可憐な花ごとゆでた美しいお浸し、コゴミのマヨネーズ和えオリーブ添え、二輪草の甘酢かけ、ヤブカンゾウの酢味噌和えなどが並んだ。圧巻は野生の大シイタケ（直径15センチ）のつけ焼きで、これは官能的とも言うべき歯ごたえと旨さであ

った。バーボンの水割りはもちろん溪流の水で作る。北海道の奥地にはまだまだ蝦夷地の色合いが残っている。

§

そのあくる日の早朝、牧草地に落ちていたシカの角を拾って土産とし、札幌に出て古本屋回りをした。これは今度の私の旅の主要目的のひとつである。

私はかねてから黒田清隆に強い関心を持っている。これは不思議な男である。幕末から維新、明治初期の激動期にかけて、切所にはほとんど必ず居り、なかなかいい働きをしている。生麦事件の時も、薩英戦争の時も、蛤御門の変の時も現場にいた。慶応元年には薩長連合のコーディネーター役を坂本竜馬とともに立派に果たし、薩摩嫌いの木戸の信頼も勝ち得て、志士として頭角を現した。鳥羽伏見の戦いや北越・東北戦線では頼りになる旗頭として常に働き、庄内藩を犠牲なしに降伏させたのは黒田の工作による。庄内藩は、薩摩・三田屋敷焼き打ちの主力だったから、苛酷な降伏条件を覚悟していたのだったが、意外に寛大な措置を受けて、西郷・黒田に心服せざるを得なかった。のちに黒田のもとで開拓使大判官を務め、もつとも廉直な官僚として今も評価の高い松本十郎は、庄内出身である。明治二年の函館戦争では黒田はまさしく主役の一人であって、敵将榎本武揚たちの命を救っておおいに男を上げた。

明治三年からは北海道開拓に注力し、意見

の合わぬ剛直な岩村通俊大判官を五年十月に追放してからは、開拓使長官としてほとんどその地の独裁権を握り、ケブロンや榎本などの大物をまるで手足のように使った。北海道はあたかも黒田の王国のごとくであった。あまりにもわがままで、思いつきの多い支配であったという批判もあるけれども、もし黒田のおおまかで太々とした筆致で描いた魅力あるラフスケッチがなければ、北海道の開発はずっとチマチマしたものになったであろう。事実、黒田がタッチする前の開拓使が計画した開発案は、旧大藩や大寺院などに細かく分割開発させるというようなせせこましいプランで、全く実効性を欠いていたし、黒田以後に一時採用された三県分割という制度も、その非個性ぶりと非能率がすぐに厳しく批判され、結局は北海道庁による行政一本にまとめられたのである。

外交面では黒田はロシアの動向に注目し続けた。明治八年、太政官政府は榎本を駐ロシア全権公使として派遣し、樺太・千島交換条約を締結させ、幕末以来の大きな課題を、とにかかくにも解決したが、このプランそのものも黒田のものなのである。中央政界の中では、征韓論で西郷が下野した後の太政官政府の立て直しの為に、大久保と木戸、そして板垣の妥協を図るべく、大阪会議を計画・推進したのは黒田と伊藤博文である。そのことは、この時点において、黒田と伊藤がポスト大久保・木戸というベ

き位置を占めたことを意味した。しかし、このあたりから黒田の運命の複雑な暗転が始まる。伊藤がそのポジションをその後フルに活用して行ったのに対して、黒田は西郷の一の弟子であり、後継者とも目されていたのに、その意に反して行動したという悔恨に付きまといわれ、伊藤のように明快に行動出来なかった。西郷は黒田にとり、北海道開拓を心から任せたいと思う希望の星のような存在でもあったのだが、西郷はその話には応ずることなく結局は薩摩土族の運命に殉じた。

西南戦争において、熊本城が西郷軍の重囲下にあった時、至急動員された別動軍を率いて薩摩軍の背後の八代付近に上陸、鋭い錐のように包囲陣を穿って熊本城との連絡を果たし、西南戦争の大勢をほぼ決したのは、ほかならぬその黒田であった。この作戦の大成功は、正面軍担当として苦戦していた山県有朋の深い嫉妬を買うこととなった。山県と黒田の間には実はすでに、北越戦線以来の確執があったのである。黒田はここでまた陰湿な敵を作ってしまった。しかし、そんなことよりも、黒田は城山での西郷の死、ついこの間まで師父として仰いでいた人の、自分とは異なる立場からの帰天を、どのような気持ちで聞いたのだろうか。それからわずか八カ月後、黒田が西郷の代わりのよりどころとして、自分の運命を託し

ていた大久保が暗殺に倒れた。その暗殺者による「斬奸状」の一節には、大久保の配下である黒田が酒狂の結果、妻を惨殺したのに、大久保が川路大警視に命じてもみ消させたという噂の一件が掲げられてあった。大久保の死についても、西郷の死と同様、自分の言動が一因をなしたという思いが、黒田にのしかかる。伊藤は大久保の死を自らの跳躍台となし得たが、黒田にとっては、逆に転落の台となって行くのである。

「酒狂」…強度の酒乱は、早くから黒田の固疾のようではあったが、明治八、九年頃からことさら激しく、かつ表立ったように思われる。すなわち大阪会議以後である。それはなぜか。その謎を私は解きたい。

酒を飲まぬ時の黒田の物言いや態度はまことに優しく、もの柔らかかで、寛仁大度そのものであったと誰もが言う。人の話もよく聞いた。彼の人使いのうまさや人の心をつかむうまさは、もっぱらその時に発揮され、屈指とも言える人脈をも築いた。そのあたりのことは専ら西郷に学んだものでもあろうが、また、天性であったかも知れぬ。西郷も優しい物言いをしたし、大山巖も、まるで女のように優しい声を出す、と、これは森鷗外が書いている。薩摩の頭領株の男たちの、それは天性のようにも思われる。黒田にしても、それは習わずとも身についたこと、つまり人柄だったのであるのに、いったん酒が入るとその人格が激変する。人の話を一切聞こうとせず、と

どまることを知らぬ怒号、悪罵、そして暴力。木戸に突っ掛かって行って、逆に布団巻きにされてしまったこともある。井上馨と会いながらピストルをひねくり回したこともある。それが、酔いから醒めるとまるで借りて来た猫のようにしょぼんとして、前日乱暴なふるまいを見せてしまった人々の家々を謝って回るのである。その「酒狂」は、もちろん、体質的・気質的なものでもあったろう。しかし、さらに深い心理的な何か、心因的な何かがある。ここにはあったようである。

黒田はよく「ジーキルとハイド」にたとえられる。繊細さと豪放さ、小心さと大胆さ、細かい気遣いと無法な横紙破り、緻密な計算と粗大極まりない無謀、まるで正反対の属性が、この野武士のような風貌の男の中に同居していた。

西郷と大久保の相次ぐ死の後、黒田にはもう頼るべき拠点は北海道開拓使しかなかったと言っている。ところが大久保の死の翌年、明治十二年一月、札幌の開拓使庁舎が焼亡した。黒田が北海道王国の天守閣とも思っていた白亜のドーム、夢と誇りの象徴が失われた。彼がいよいよ腰を据えて北海道開拓に専念しようとしていた矢先のことである。黒田はなすすべもなく茫然と夢が崩壊する大きな炎を見つめた。「長官御立合ノ上焼申候」と記録にはある。運命の逆転の荒波はここから一挙に高まり、やがて開拓使事業払い下げ問題、明治十四年政変へと雪崩れて行くのである。

十四年政変こそは、黒田がまんまと伊藤に利用され、伊藤の最大のライバルであった大隈追い落としの一翼を担うことになってしまった事件である。主役は伊藤、その背後にいる演出家は岩倉、敵役仁木弾正に仕立てられたのが大隈、そして、黒田は赤つつらの道化役に過ぎない。しかもこの時、伊藤は大隈を斬った返す刀で黒田も斬る。以後の黒田はほとんどひとえに伊藤のマリオネットである。時としてその操りの糸をなんとか断ち切ろうとあがくのであるが…。

§

私はこのドラマチックな男を通じて、明治初期、まあせいぜい二十年代前半頃までをきちんと書いてみたいと常々考えていた。彼と、彼の北海道は、ある意味で日本の近代化のモデルケースであるように思うのである。それは失敗の面も成功の面も豊富に含み、なによりも、当初の期待とは違う歪んだ形として実現する「可能性」というものについての、典型的サンプルでもあるように思う。ここを描くことによって、日本の近代の中に、ある時期から巣くった「空洞化」の実態とでも言うべきものも、あるいはかいま見えるのではないか。『回覧実記』の記述から我々が興味深く見て取る日本の近代化のエスキスとは、全く異なるタッチのエスキスを、黒田がわずかな間にもせよ描いて見せていたことはたしかなのである。

彼を中心に置くとすれば副主人公の一人と

して榎本は外せまい。榎本がからんでくれば勝もからみ、福沢諭吉もからんで来る。岩村通俊、厚司の判官こと松本十郎、宮古湾の英雄荒井郁之助、ケプロンやライマンその他の開拓人士、西郷・木戸・大久保・岩倉といった太政官政府の上司たち、大隈・伊藤・井上・山県・松方といったライバルや政敵たちもからんで来よう。なによりも開拓使事業と政治の実態を見なくてはなるまい。

§

そこで、古本屋の話に戻る。まずこれらのことについてもっとも基本的な文献を探ることが必要になった。今回入手した主な本は次のとおりである。

①『開拓使事業報告』全七巻（明治十八年大蔵省刊の復刻）

②『新撰北海道史』全七巻（昭和十一年北海道庁刊）。この中の史料編には、ケプロンやライマンの報告、金子堅太郎による「北海道三県巡視復命書」「岩村長官施政方針演説書」など、初期・中期の主要史料が入っている。

③『北海道史付録（管轄略譜・年表・統計表）』（北海道出版企画センター刊）。大正七年に河野常吉を編纂者として、最初の官撰北海道史が計画されたのだが、編纂者が道庁の汚職のことなどを忌憚なく書いたため、当局者に忌避され、部分的にしか出版されなかった。この年表もお蔵入りとなり、しかも火災にあったため、ほんの少数だけが編纂者

の手に残った。その戦後復刻版である。

④『新北海道史』（昭和四十四年北海道刊）中の「通説二」（開拓使時代・三県一局時代）「同三」（北海道庁時代前期）、そして「史料一」「史料二」。これはバラで入手した。

「史料一」には『新撰〜』には欠けていた「開拓使日誌」が全巻入っている。ランメンから開拓使あてに送られた津田梅の近況を知らせる手紙や梅自身の作文なども紹介されている日誌である。

⑤『新北海道史年表』（北海道出版企画センター刊）。これは④の『新北海道史』に付属した年表であるが、年表だけが軽装版で出ており、当然安い。

⑥『北海道志』全二巻（歴史図書社）。紛らわしい書名だが、開拓使が集めてまとめた史料集で、もともとは和綴本25五冊であったものの復刻。引用書は190冊に及び、多分に羅列的で、編纂方法も古いので、利用に慣れるまで時間がかかりそうである。

このほか、函館戦争に関するものを数種類、拓殖史に関するもの、屯田兵に関するもの、行刑史に関するもの、榎本ほかの伝記、外国人顧問に関する資料、北海道史、地誌に関する雑書十数点ほど。また、岩村通俊の死後、遺族が遺文類を集めて私家版として出した

『貫堂存稿』の、やや痛んではいるが安いのが見つかったので買い入れたが、これはなかなか出色の史料であった。驚いたことに、二五巻にも及ぶ連句（歌仙）が収められており、

連衆の一人は、外交畑から富山県知事に転じた森山茂、もう一人は木戸の後齋藤道場練兵館の塾頭を務め、明治期には大阪府知事として怪腕を振るった渡辺昇である。このことを私の連句仲間に話したところ、福沢諭吉夫人も「古錦」という俳名で俳句と連句をやっており、連句については小築庵蝸堂という、その時代の大宗匠に付いて本格的に修行、慶応義塾の場を借りて運座も持ったこと、その座には、鳥尾小弥太とか伊藤博文も顔を出したりしたことなどを教えられた。明治の政治家や官僚は、結構風流だったのである。

こうしていくらかの本を買い集めたほか、手持ちの本の中で、参考に出来る記述のあるものを探り、手近の本箱に掻き集めて見た。さて、こうして拾い集めた歴史の断片のようなものが、今後私の中でどんな形のものを生んでくれるのか。少なくとも二、三年後くらいには、予想している主人公たちが亡霊として膨れ上がって来て、実像として結晶化し、語り始めることを期待したい。そうとすれば、多分これは、私にとって最後の大きな仕事になって行ってくれるはずなのであるが…。皆さんも、もし黒田清隆とその周辺について、何か史料・資料めいたものの存在に気が付かれたら、お知らせいただくとありがたい。

§

追記 はじめに書いた鹿の墓のことであるが、その後、こんなはがきが現地から送られて来た。

「水沢さんが札幌に向かった二日後の夜のことです。犬のラピスが激しく吠え、また鹿でも来ているのかなと思っていたのですが、次の朝見たら、鹿の親子が眠るさくらんぼの木の間もとがみごとに掘られて何者かにさらわれていました。でもこれでなんだかホッとした気持ちになりました。」

考えられるのはやはり、熊の仕業ということであろうか。鹿たちが改葬したというのはいくら何でも考え過ぎであろう。ともあれ、北海道というのは、まだそんな話が実際にある、すてきな夢の土地なのである。

幻を埋めし塚や初蛸



占冠の二日間を友人がコンピューターで日記にしてくれた。その、野花南尾根の1日。夜は大天麩羅パーティーだった。

松前の桜と北海道の旅記念文集

／

米欧亜回覧の会

／

二〇〇四年九月一日発行

／

編集

水沢 周

／

製作

永島千代子

・

中山 進

・

納家弘美



米欧亜回覧の会

〒192-0063 東京都八王子市元横山町 1-14-16

Tel 0426-46-3310 Fax 0426-45-8700

E-mail: info@iwakura-mission.gr.jp

URL: <http://www.iwakura-mission.gr.jp/>